



JESUS CHRIST

The Special Grace of God
to Humanity

JOHN A. DANIEL

イエス・キリスト、
特別な恵み
の
神から人類へ

ジョ
ン・A・ダニエル著

著者の他の著書

1. 提出（当局
神と
神の王国への唯一の道

2. クリスチャンの最後まで競争（

王位）
3. 幕屋は影として
キリスト
4. 終末の霊的な道
祈り（即効性のある契約の祈り）

5. 契約

著作権はジョン・A・ダニエル牧師が所有します。

2001年6月

2003年6月 第1刷

聖書の引用は、公認の欽定訳聖書からのものです。

著作権は留保されています。本書のいかなる部分も、著者の許可なく複製、複写、電子的、録音、その他のいかなる形態での保存も禁じられています。

この本は主の定めにより無料で配布されます。

献身

私は、この本を、恵みと真実の創造主である父なる神と、その息子であり、地上における恵みと真実の顕現として、聖霊によって私にインスピレーションを与え、長年隠されていたこれらの奥義を書き留めてくださったイエス・キリストに捧げます。私は、この本を、私の最愛の妻と子供たち、メアリー・ブレッシングス・ダニエル、ティモシー・ジョン・ダニエル、ベンジャミン・サミュエル・ダニエル、そしてデイビッド・ジョセフ・ダニエルに捧げます。彼らは神の恵みによって私に与えられ、彼らとの交わりは、私が神から受ける祝福の秘密でした。私はまた、神の恵みによって神に召された、このヘルプ・アンド・リコンシリエーション・ミニストリーおよび聖書訓練大学（HARMABITRAC WORLD OUTREACH）の同労者と兄弟たち、ジョシュア・N・サミュエル、モーゼス・P・

エイモスと家族、ジェームズ・ダニエル、ジョセフィン・アグ、ルース・ンディディアマカ・フィリップスはアメリカ合衆国にいます。

私は亡き父エマニュエル・ヌワフォル・オゾエクウェ・イグボアヌゴを偲んで、この本を最後に捧げます。父の過去の人生に、私は神の信じられないほどの愛と特別な恵みを見ました。1991年11月から12月にかけて父が部分的な脳卒中を起こした時、私は兄弟たちと共に傍らに立ち、詩篇90章10節にある神のしもべモーセの祈りに従い、主に父が回心できるようあと10年の猶予を与えてくださるようお願いしたからです。なぜこのようなお願いをしたかというと、父は当時72歳近くで、借り物の人生を送っていたからです。重篤な病気で父が亡くなり、地獄行きの候補者になっていたであろうという事実を考慮して、神はこのお願いを聞き入れられました。しかし、2000年10月3日、父は主イエスを自分の主であり救い主として受け入れ、洗礼、すなわち浸礼を受け、聖霊の洗礼を受けて新しい言葉で話し、回心しました。2001年3月3日、つまり5ヶ月後（恵みの数字です）、父は81歳を超えて主の懷に安らぎを求められました。亡き父がこの世を去ることができたのは、主が父に与えてくださった特別で豊かな恵みのおかげです。私は、主への感謝を尽きることがありません。恵みと真理の奉仕者である主イエス・キリストの御名が讃えられますように。

コンテンツ

1. 聖霊が明らかにしたこと
恵みと真実の原則。
2. 法律や人間の能力を
恵み。
3. イエスの御名を信じる。
4. 律法と恵みの違いに関連したサマリアの女とニコデモの違い。
5. 恵みによって律法の無力さから救い出すことは可能でしょうか？
6. 世界と対照的な言葉。
7. GRACE FOR GRACE とは何ですか？
8. 恵みは、人間の働きや能力の終わりに、死から命をもたらします。
9. 恵みの拒絶は
非難。
10. 人間の能力ではできなかったことを、神の恵みがダビデのために成し遂げた
のです。

第1章

聖霊が明らかにしたこと 恵みと真理の原則

恵みという言葉はギリシャ語でカリスであり、カレセと発音され、受け入れられる、利益、好意、贈り物、恵み、喜び、寛大さ、楽しみなどを意味します。しかし、ロナルド・F・ヤングブラッド編のネルソンス新図解聖書辞典によると、恵みとは

受ける人の価値や功績に関係なく、またその人が何に値するかに関係なく示される好意や親切。

チェンバーズ辞典によると、原則とは源、根、起源、根本的または主要な原因、始まり、本質、議論の根拠となる理論的根拠または仮定、本能または自然な傾向、行動の源などを意味します。チェンバーズが記した原則の意味の一部として源と始まりという言葉詳しく説明すると、源は父を意味し、始まりは言葉を意味します。これが、ヨハネ1:1が「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった」と言った理由です。したがって、これはイエスが父なる神ご自身であり、言葉であり、源であり、神の創造の始まりであり、神の恵みも含まれていることを示しています。主なる神の資質または美德の1つとしての恵みは、慈悲、愛、同情、忍耐と関連しています。神の恵みは常に無償で値するものではありませんこれは神から与えられた不当な賜物であるため、悔い改めと信仰を通じて神に対して全面的な忠誠を誓う人々、あるいは神のみのために生きるという契約関係を結ぶことに同意した人々もこれを受け取ると説明されています。

だからこそ、私たちが恵みと真理の原則について語るとき、私たちは神が創造において何をなさったか、そして神が受け入れ、その中で歩むことを期待されている人々について語っているのです。つまり、神は6日目に人間を創造の最後として創造されましたが、この創造に基づいて行動されたのです。

神は恵みと真理の原理に基づき、他の被造物を支配するという神の契約によって、人間を創造物の最初であり頭とされました。なぜ神はそうすることを選んだのでしょうか。

それは、創造の際、人間が三位一体において、神の御言葉、すなわち神の御姿、主イエス・キリストによって表されたからです。これが、イエスがユダヤ人たちに、アブラハムより前に、ご自身が神の御言葉であったことを告げさせた理由です。イエスは、神の恵みが至高に啓示され、人間の姿で与えられたのです。イエスは神の恵みの受益者であるだけでなく、人類の救いのためにもたらされた神の恵みの、人間としての顕現でもありました。イエスは死と復活によって、神とその民の間に失われた断絶した交わりを回復し、ユダヤ人と異邦人の両方を含む神の民との間に、父と子の関係という契約を確立しました。恵みと真理の原則は、初めから存在していました。恵みと真理、水と血、愛と義、父と子、聖霊と御言葉、信仰と行いを、切り離すことはできません。これらはすべて不可分であり、同じ源、同じ経路から来ており、神の神性を証明しています。

恵みは真理を生み出します。恵みは真理を要求するのではなく、むしろ真理と共存します。恵みがなければ真理を持つことはできません。恵みの中を歩んでいる人は、必ず真理の中を歩んでいるはずで

主なる神は土の塵で人を造り、その鼻に命の息を吹き込まれた。人は生きた者となった。主なる神はエデンの東に園を設け、そこにご自身が造った人を置かれた。主なる神は土から、見て美しく、食べるに良いあらゆる木を生えさせられた。園の中央には命の木と善悪を知る木が生えていた。

(創世記2:7-22)

神が人類に対して抱く善なる思いは、創造の際に神が人間に対して行ったことを通して容易に証明できる。この恵みと真理の原則に基づき、神はアダムに地上のあらゆる創造物の中で卓越した地位を与えるだけでなく、アダムにすべての創造物に対する絶対的な権威を与えた。このため、神は

神は、アダムが神の戒めを守り続けるならば、永遠に神の栄光の中を歩むことを許しました。私が下線を引いたこの言葉は、恵みの中を歩むことが期待される人々が守るべきいくつかの基本的な指示があることを示しています。そして、それらの指示は彼らを神の神聖な真理の顕現とします。だからこそ彼らは契約の民、あるいは神の民とみなされるのです。神は彼らに対して、神の恵みである愛、慈悲、同情、忍耐を注いでくださいます。一方彼らは、どんなに苦痛であろうと、社会や世の人々からどう見られようと、神の指示を守らなければなりません。神の民が神の言葉に純粹に忠誠を尽くすこの行為によって、彼らは人の形をとった神の真理となります。これが、「恵みは真理を生み出す」という言葉の由来です。イエスが人の形をとった神の恵みとなるためには、父から真理を生み出す必要もありました。この理由から、イエスは父からの指示のみに従って行動されました。神自身の個人的な願望や意志でさえ、神に逆らう行動をさせることはできず、このことがまた、神の真理が人間の形をとったものとなったのです。創世記第2章をもう一度見てみると、神が人間を創造した後、エデンに園を設けたことがわかります。そこは人間の家として機能しましたが、靈的には、神の恵みが真に実践されるべき最初の教会であると考えられています。神はその園に人生のあらゆる良いものを備えさせ、善悪を知る木をそこに植えて、人間にとっての教師の役目を果たさせました。これは、神が園を人生の良いもので囲んでいるにもかかわらず、人間は神の前から追い出された邪悪な生き物たちの真ん中に生きていることを学んで理解しなければならないことを示しています。神は野の獣、空の鳥、海の魚、地を這うすべての生き物など、それだけに留まらず、人間にそれらを支配する権限を与え、好きな名前を付けるように命じました。神は人間の孤独に同情し、人間に助けを与えることを決意し、その過程でエバが創造されました。

これらの行為は神が人類に与えた愛、慈悲、思いやりであり、神の恩寵と総括することができます。

人間は神からのこの善行にどのように応えるべきでしょうか？

神の恩寵は必ず真実を生み出すという神の原則に従い、神は、神の恩寵を受けた証拠として、人間が従うべき戒律を与えました。

主なる神は人を連れてエデンの園に置き、耕させ、守らせた。主なる神は人に命じて言われた。「園のどの木からも、あなたは心のままに食べてよい。しかし、善悪を知る木からは、食べてはならない。それを食べると、必ず死ぬからである。」

(創世記2:15-17)

人間が神の恵みを受けて歩み出すとき、神が人間に与える最初の戒めは、庭を整え、それを守ることです。

先ほど、園は霊的に教会を表していると述べました。園を飾るということは、契約の民であるはずの園の住人たちに説教し、教え、導くことを意味します。なぜなら、園は契約の民のために創造されたからです。そして、彼らが敵に陥って創造主との契約関係を破ることがないよう、彼らのために執り成しをするのです。園を守るということは、番人、あるいは羊飼いでして園の住人たちを見守ることを意味します。これを効果的に行うために、人は善悪を知る木の実、つまり傲慢さや自己中心性といった罪に陥る原因となるものを避け、模範を示す生き方をしなければなりません。神は、人がその実を食べる日には必ず死ぬという厳しい警告を人間に残しました。その後のことは、人間が恵みに伴う真理を生み出さなかったために、今や歴史となっています。人間は神の恵みを受け入れましたが、恵みが生み出す神の真理を受け入れ、その真理に従って歩むことを拒否しました。その結果、人間は神の恵みを含むすべてを失いました。

聖書では言うものの一つとして言及されている悪魔に、この世の統治権を委ねています。

人間の墮落後、神はもはや恵みと真理の原則に基づいて行動することができませんでした。アダムの後生まれ、恵みの中に完全に歩んでいた者たちは、真理を生み出す（すなわち、罪を犯さずに神の戒めを守る）ことができなかつたからです。神の恵み（栄光）を通して神と人間との交わりが突然断絶されたことは、神に大きな衝撃を与え、ご自身の姿に似せて創造された人間が、神の最大の敵である悪魔に屈服するのを、神は見えていませんでした。男と女が裸で（罪の中で）歩み、それによってさらなる罰にさらされているのを見た神（神）は、一時的な回復の行為を開始しました。

主なる神はアダムとその妻のために皮の着物を造り、彼らに着せられた。（創世記3:21）

神は動物を殺し、その血を用いてアダムとエバの罪を一時的に覆い、その皮で二人の着物を作った。罪深いアダムとエバの代わりにこれらの動物を犠牲にすることで、二人は神との交わりを取り戻したが、それは恵みと真理の住まいであるエデンの園ではなかつた。血は彼らの罪を赦すために用いられたが、同時に神の怒りと裁き、すなわち死を鎮めるためにも用いられた。これは神の聖性の義の部分が必要とするものであった。そのため、神は彼らに恵みの恩恵から少しの恩恵を得ることを許したが、恵みの中で生き、歩むことは許さなかつた。

これは人類、そして今日のキリスト教徒の90%に当てはまります。彼らは神の恵みの恩恵をほんのわずかしが享受できず、真理を生み出すことができないため、恵みの中で生き、歩むことができません。多くの神の牧師たちは、私たちは恵みの中にいるので、もはや律法の下にはないと主張してきました。彼らは説教や教えの中で、さらに踏み込んで、「主は御霊であり、主の御霊のあるところには自由がある」（コリント人への手紙二3章17節）という聖句を引用しています。

実のところ、私たちは恵みの摂理の中にいるのですが、世の人々は、同じ恵みが私たちを神の摂理の下におくことを知らないのと同じように、

神の律法（真理）は、キリスト教世界の大多数の人々が、自分たちが従っていると主張し、それに従って歩んでいる恵みが、自分たちが従っていないと主張する律法（神の真理）を生み出していることを知らない理由でもあります。そして、主が「主の御霊のあるところには自由がある」と言われた意味は、もし主の御霊があなたの内に宿り、実際にあなたを導いているなら、あなたは主があなたの人生や交わりの中で望むように自由に働けるようにし、あなたの計画や活動で主を閉じ込めようとしてはならないということです。なぜなら、世は自らのシステムを通して、主を彼らの計画から完全に締め出しているからです。恵みは律法を取り払うのではなく、律法にある断罪（死）を取り除き、あなたの心（霊）に律法を確立し、あなたが責められることなく律法に従えるようにするのです。恵みと真理を受け、それに従って歩まなければ、誰も律法の下を責められることなく歩むことはできません。神が私たちに律法（戒律）を与えた主な目的は、律法に従おうと熱心に努める人が、律法が要求するすべてを守ることができないことに気づき、恵みと真理の原則に基づいて行動し、神に効果的に従えるよう助けてくださるよう神に祈ることです。先ほども述べたように、神が人の罪のために受けた苦しみは、同じ罪によって人が受ける苦しみよりもはるかに大きいのです。父なる神の人格、すなわち神の神性、すなわち神の聖性は、その時、混乱に陥りました。なぜでしょうか？それは、神の聖性、すなわち神の本質の中に、神の怒りによって守られる神の義と、その怒りを鎮める神の愛があるからです。神の怒りは、人間が生み出すことのできない義を要求しました。そのため、人は神に近づこうとすれば必ず死に直面します。なぜでしょうか？それは、父と子との関係における契約が破られ、契約を破った者は死ななければならないからです。神の怒りは、この恐ろしい要求を妥協する用意がなかった。なぜなら、人間の罪によって神の義はひどく損なわれており、そのためには死の罰がなければならないからだ。したがって、人が命を犠牲にするならば、それは霊の死であるため、神の前に再び生きることはできない。

私たちが話しているのは、神の体です。一方、神の愛は、人を受け入れ、人の罪を赦し忘れ、人と完全な交わりを保ち続ける用意ができていました。神の義が人が神との交わりに完全に戻るために要求するものを、人が守ることは不可能であるという事実を鑑み、神の愛は、人が神の御前に生き続けるために必要な代価、すなわち罰として、自らを明け渡すことを進んで申し出ました。預言者イザヤはこのことを予見し、預言的にこう言いました。「主は言われる。さあ、われわれは共に論じよう。たとえあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなり、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。もしあなたがたが喜んで従うなら、地の良いものを食べよう。しかし、もしあなたがたが拒み、背くなら、剣で滅ぼされる。主の口がそう語ったからだ。」(イザヤ書1:18-20)

私たちの主イエス・キリストの来臨により、神の愛によって人類の罪が償われたので、人類が甘美で完全な交わりを求めて神のもとへ戻る舞台が整いました。

何を根拠に？預言者イザヤはこう答えました。「さあ、主と論じ合おう」。人はどのようにして神と論じるのでしょうか？それは、自分が罪を捨て、全能者によって与えられた恵みの住まいに戻り、神の戒めに従うことで恵みに伴う真理を生み出す準備ができているかどうかを知るためです。しかし、人類は皆、これに同意するのでしょうか？答えはノーです。なぜなら、使徒パウロを通して聖霊なる主が「ですから、私たちはあわれみを受け、恵みを受けて、時宜にかなう助けを得るために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」(ヘブライ人への手紙3章16節)と明言したにもかかわらず、人間の回復が始まって以来、この呼びかけに耳を傾けることに同意したのはごくわずかだからです。信者の大多数、そして一般の人類は、恵みの恩恵のほんのわずかな部分をかじっているに過ぎません。それゆえ神は聖霊に、恵みに留まり、恵みに従って歩み、そして

神の恵みに伴う真理を生み出すために、自らの意志、快楽、欲望、世俗的なものを犠牲にするのです。

わたしの聖徒たち、わたしと犠牲を捧げて契約を結んだ者たちをわたしのもとに集めよ。
(詩篇50:5)

神はその指示において非常に具体的です。それは、この世のあらゆるもの、つまりこの世のあらゆるシステムをすべて捨て去り、神の恵みの中に留まり、その中を歩むことによって、神と契約を結んだ聖徒だけが神のもとに集められるべきだとおっしゃったからです。主にどのように犠牲を捧げるべきか、そしてどこで犠牲を捧げるべきかについてさらに詳しく知りたい方は、私の著書『キリスト教徒の終わりへの競争（王座への資格）』をご覧ください。キリスト教世界の多くの人々でさえ、あらゆる宗派から距離を置いています。恵みの中に留まっています。なぜなら、彼らはこの世の出来事から完全に離れることを拒否しているため、神が望むように、不信仰な世界に真理を伝えることができないからです。

しかし、この終わりの時に、神は御霊を通じて、男性、女性、子供、乳飲み子までも蘇らせ、今も蘇らせ続けています。彼らは神と交わした契約により、神の恵みの中に留まり、その中を歩み、あらゆる困難を乗り越えて真理を生み出します。そして神は、彼らを間もなく世界に明らかにし、見て味わえるようにされます。

第2章

法や人間の能力と恩寵を比較する

第1章で恵みの意味について述べましたが、両者を比較しやすくするために、「律法」という言葉の完全な意味を明らかにすることも重要です。ネルソンス新図解聖書辞典によると、「律法」とは、社会を統治するための規則と規制の秩序ある体系を意味します。それは、肉体の自然な欲望を抑制し、抑圧する永遠の特別な力とみなされています。また、束縛をもたらす死の働きとも考えられています。

しかし、石に刻まれ、刻まれた死の務めが栄光に満ちていたとすれば、イスラエルの子らはモーセの顔の栄光をまじまじと見ることができず、その栄光は失われようとしていたのです。霊の務めは、もっと栄光に満ちていなければ、どうでしょうか。罪を宣告する務めが栄光であるならば、義を宣告する務めは、なおさら栄光に満ちているのです。(コリント人への手紙二 3:7-9)

聖霊は使徒パウロを通してこう語られました。「律法が一般的に死の務めと呼ばれているものが栄光に満ちているのなら、恵みと呼ばれる霊の務めが、どうしてもっと栄光に満ちていないはずがあるだろうか。』律法はさらに「罪を宣告する務め」とも呼ばれ、一方、恵みは「義の務め」として知られています。今日私たちに象徴される律法、すなわち聖霊に導かれていないものからは、いかなる命も生まれ得ません。

律法が入り込んだのは、罪が増し加わるためでした。しかし、罪が増し加わったところに、恵みはなおさら豊かに加わりました。それは、罪が死に至って支配したように、恵みも私たちの主イエス・キリストによって、義によって永遠の命に至って支配するためです。

(ローマ5:20-21)。

ここでの罪という言葉は、律法、人間の業績、神の導きなしに肉を通して行われるあらゆる行為を意味します。

聖霊。この聖句は信者の人生に関するすべてを網羅しています。もしあなたの行いが神の霊の導きによるものでなければ、それは決して恵みと真理ではなく、必ず人を死へと導きます。

律法はモーセによって与えられたが、恵みと真実はイエス・キリストによってもたらされたからである。(ヨハネ1:17)
恵みは律法と対照的に提示されています。この聖句では、律法を背景に、恵みと真理を対比的に高めています。

これは、律法がモーセに与えられたように、恵みと真理の背景となったことを意味します。これは、現代の私たちにとって、人間の努力や功績が恵みと真理を増し加えることを示しています。律法や人間の努力は、神の恵みと真理によって増し加えられるのです。恵みと真理がイエス・キリストを通して与えられたと言うことは、信じることによって神の名によって命を得ることができると言うことです。なぜでしょうか？それは、私たちの主イエス・キリストによって、恵みが永遠の命へと支配するからです。

この人はモーセよりも栄光にふさわしいとみなされました。家を建てた者は家よりも大きな誉れを受けるからです。すべての家は人によって建てられますが、すべてを建てたのは神です。モーセはまことに、その家のすべてにおいて忠実な僕として仕え、後に語られるべきことの証しをしました。(ヘブライ人への手紙3:3-5)

この聖句は、家の建築者であるイエスが、神の家全体において非常に忠実な僕とみなされていたモーセよりも、より大きな栄光にふさわしいとみなされたように、恵みは律法よりも栄光に満ち、より尊ばれるべきであると説明しています。イエス・キリストがモーセよりも優れていることは、恵みが律法よりも優れていることを示しています。「優位性」とは優位性、重要性を超えた存在、非常に優れ、優れているという意味です。一方、「指示的」という言葉は、証拠となる、明らかにされた、意味のある、前兆となる、重要な、暗示的な意味を持ちます。この「優位性」と「指示的」という表現は、恵みが律法よりも明らかに優れていることを示しています。恵みの偉大さを理解するには、あらゆることにおいてイエスが優れていることを理解しなければなりません。イエスとモーセを比較できないように、恵みと律法を比較することもできません。

比較は創造主と被造物、霊的なものと自然のもの、神的なものと罪深い性質、無限なもの
と有限なもの、永続するものと消滅するものとを比較するようなものです。恵みとは、神が有限
なものに対して無限の愛と優しさを差し伸べることです。

男。

民は皆、雷鳴と、いなずまと、ラッパの音と、山の煙るのを見て、遠く離れて立ちました（出
エジプト記20:18）。

あなたたちは、触れられるような、火で燃える山、暗黒と闇と嵐の山に来たのではない。ラッ
パの音と言葉の声を聞いた人々は、その言葉がもう自分たちに語られないようにと懇願し
た。彼らは命じられたことに耐えることができなかった。もし獣が山に触れただけでも、石で
打ち殺されるか、矢で突き刺されるであろう。その光景はあまりにも恐ろしかったので、モー
セは言った。「私は非常に恐れ、震えている。」

（ヘブライ12:18-24）

これは律法（死の務め）について語っており、律法の下では誰も神の前に立つことができま
せんでした。律法には命がありませんでした。律法は神の裁きと怒りに満ちていました。イス
ラエルの民は山の頂上に登ることも、触れることもできませんでした。彼らの家畜でさえ山
に触れることを敢えてしませんでした。触れれば、石打ちに遭ったり、矢で突き刺されたりす
る危険があったからです。

しかし、恵みのもとでは、私たちは大胆に神の恵みの御座に来よう招かれているだけでな
く、回心した私たちは霊的に父なる神、無数の天使の群れ、総会、完全な者とされた義人の
霊、天に記されている長子たちの教会、新約の仲介者であるイエス・キリスト、そしてアベル
の血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血と共に、まさに天のエルサレムであるシオンの
山に生きているのです。恵みの働きには決して失敗はありません。なぜでしょうか？それは、
恵みと真理をもたらしたイエスが、その存在、人格、そして働きにおいて無限だからです。こ
の対比は、

律法、人間の努力、あるいは聖霊の導きなしに行うどんなことにおいても、私は決して従いません。恵みと真理は、神の生ける啓示である、肉となった御言葉が人々の間に住まわれることによってもたらされました。

イエス・キリストの真の弟子は、恵みと真理を受けていれば、この世のシステムから召し出されることはあり得ません。なぜでしょうか？それは、この世における恵みと真理の顕現であるイエスが、この世のシステムの一部ではなかったし、今もなおそうではないからです。もしあなたがイエスに真に従うなら、あなたもまたこの世のシステムの一部ではないでしょう。だからこそイエスは、「今後、わたしはあなたがたと多く語らない。この世の君が来るが、わたしの中には何も持っていないからである」（ヨハネ14:30）と言われたのです。

これらのことを話したのは、わたしにあってあなたがたが平安を得るためです。あなたがたはこの世で苦難を受けるでしょう。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っています。（ヨハネ16:33）

イエスは、この世の君は自分のうちに何も持っていない、と行うことができました。なぜなら、イエスは悪魔がこの世に築いた体制の一部ではなかったし、これからも決して一部となることはないからです。イエスは家族の事柄の一部ではなく、彼らの教育の一部ではなく、彼らの宗教制度の一部ではなく、彼らの聖職者ではなく、彼らの政治の一部ではなく、彼らの事業の一部でもなく、彼らの伝統から完全に切り離されていたので、悪魔はイエスのうちに何かを持っていることを誇ることができませんでした。このため、イエスはヨハネによる福音書第16章で、あなたがたがこの世の体制から完全に離れてイエスのうちにとどまり、イエスのために生きるなら、あなたがたは平安を得るだろう、しかし、あなたがたがこの世の体制の中にあるなら、体制のあらゆる部分が霊の煩いに満ちているので、あなたがたは患難を受けるだろう、と言っていました。イエスの真の弟子に関することはすべて神の啓示です。あなたが主イエスの弟子として生きていて、システムから抜け出すようにという救い主の呼びかけに耳を傾けていないなら、あなたは恵みと真実の中を歩んでいません。真実はシステムの中にはなく、これからも決して存在しないので、あなたの中にはまだ嘘があります。

しかし、あなたがたは神を知り、あるいはむしろ神について知られるようになった今、神よ、どうして再び弱く貧しい自然界に頼るのですか。

あなたたちは何に束縛されようと望んでいるのか。あなたたちは日や月、季節や年を守っている。わたしはあなたたちの労苦が無駄になったのではないかと心配している。(ガラテヤ 4:9-11)

ここで言及されている弱く乞食的な要素は、律法について語っています。それは、主イエスを恵みと真理の奉仕者として受け入れた聖徒たちに与えられた特別なメッセージです。そして聖霊は使徒パウロを通して彼らに、父（聖霊）の約束を受けた後、なぜ彼らは日々、月、時、年を自分たちの計画の中で守り、律法の束縛の中にしようと望んでいるのかと問いかけています。これらすべての遵守は律法のもとで行われるべきであり、恵みのもとで行われるべきではありませんでした。イエスは、人類に恵みがもたらされる前に、まず律法を成就するために来られたので、これらすべてを守る必要があったのです。多くの神の奉仕者は、恵みのうちを歩むことを、無頓着な生き方と結びつけます。また、恵みを教えるときには、真理もまた恵みのうちにある人々の生活の中で教えられ、要求されなければならないと信じ、教える牧師もいます。しかし、恵みと真理は切り離せないものであり、片方だけで表されるものではありません。

しかし、正しいのは、恵みが真実を生み出すのであって、真実を要求するのではないということです。

そして、言は肉となって、わたしたちの間に住まわれた。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。(ヨハネ1:14)

上記の聖句は、恵みと真理の関係をより明確に説明しています。両者は不可分であるため、共に評価されます。律法は要求を課します。律法におけるすべてのものは、人にこれを持ってこい、これを行わなければならないと要求していましたが、恵みはすべてを生み出します。恵みは無償であり、何も要求しません。神は人に恵みと真理を与えます。恵みがなければ、人は真理を生み出すことはできません。

恵みの教師としての律法

しかし、聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めました。それは、イエス・キリストを信じる信仰による約束が、信じる人々に与えられるためです。しかし、信仰が来る前は、私たちは律法の下に閉じ込められ、

後に啓示される信仰です。ですから、律法は私たちをキリストに導き、信仰によって義とされるための養育係でした。しかし、信仰が現れた後は、私たちはもはや養育係の下にはいません。なぜなら、あなたがたは皆、キリスト・イエスを信じる信仰によって神の子どもだからです。(ガラテヤ3:22-26)

この聖書における「信仰」という言葉は恵みを意味し、主はパウロ兄弟を通して、恵みの扉が開かれる前、私たちは律法の下に留まっていたと語られました。それは、アダムの墮落によって受け継いだ罪深い性質のために、神の言葉を守ることができないことを明らかにする教師のような存在でした。ユダヤ人は実際には律法の下にはいませんでした。そうでなければ、イエスが来られた時に、彼らはイエスを知ることができたでしょう。もし彼らが真に律法を守っていたなら、神は彼らに義を与えることができたでしょう。ユダヤ人とパリサイ人は律法の下にいたように見えるかもしれませんが、彼らの心は律法の中ではありませんでした。ですから、彼らは律法に従っていませんでした。イエスはこう言われました。「律法学者とパリサイ人はモーセの座に座り、彼らがあなた方に命じることはすべて守り行いなさい。しかし、彼らの行いには従ってはなりません。彼らは言うだけで、行わないからです。」(マタイ23:2-3)モーセの座に座る

議席は、法律は遵守されなければならないと主張することを意味しますが、彼らが他人に強制することは、法律の簡単な部分さえ実行できないことです。

アブラハム、イサク、ヤコブ、そして旧約聖書の聖徒たちは、律法を守ったため、義とみなされ、死後皆楽園に行きました。真に律法の下にあり、それを守っている人々は、恵みと真理が宣べ伝えられた時、どのようにしてイエスを見分けられるのかと問うでしょう。パウロは律法を守りました。彼はパリサイ人、律法学者でした。神がユダヤ人に与えた力や権威よりも偉大なものはないので、彼は自分があらゆる力と偉大な権威を持っていることを知っていました。しかし、彼はその光（イエス）を見た時、それが超自然的なものであることを知り、すぐにひれ伏しました。彼はイエスが神以外の何者でもないことをすぐに悟り、その主権を認めました。もし彼らが真に律法の下にあり、神から与えられたものを受け入れていたなら、律法は彼らの教師として、彼らをキリストへと導いたでしょう。ニコデモはこのようにしてキリストへと導かれ、他の多くの人々もキリストへと導かれました。

誠実に律法の下を歩み、その支配下にある権威に従っている不信仰な世界の人々も、恵みと真理の奉仕者である彼に導かれ、律法の束縛から解放されるでしょう。

それゆえ、律法の行いによっては、神の前に義とされる者は一人もいません。律法によって罪を知るようになるからです。しかし今や、律法によらない神の義は、律法と預言者によって証しされ、明らかにされています（ローマ3:20-21）。

私たちは、イエスが律法の正義と義の要求をすべて満たし、正義が満たされると信じることで、自分自身の中に律法を確立します。私たちは自分自身の中に律法を確立しなければなりません。なぜなら、イエスが律法を成就したことを信じなければ、恵みと真理の中を歩むことはできないからです。

主はモーセに言われた。「燃える蛇を造り、それを柱の上に掲げよ。蛇に噛まれた者は、それを仰ぎ見ると、生き返るであろう。」モーセは青銅の蛇を造り、それを柱の上に掲げた。蛇に噛まれた者は、青銅の蛇を見ると、生き返った。（民数記21:8-9）

そして、モーセが荒野で蛇を高く上げたように、人の子も高く上げられなければなりません。それは、彼を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためです。（ヨハネ 3:14-15）

真鍮は裁かれた罪を意味し、燃える蛇は十字架上のイエスを象徴しています。神はモーセに、神の恵みを掲げるしるしとして、真鍮の蛇を掲げるように命じました。律法は常に恵みを掲げます。燃える蛇を掲げることは、神の恵みであるイエスを掲げること、そして律法によって私たちが受ける罪と死の束縛を解き放つことを表しています。イエスが地上に現れたのは、神が恵みによって人間に近づいたからです。律法の下では、人間は天にある神の基準に近づこうとしていましたが、恵みの下では、神が人間のもとに降りてこられたのです。

律法の行いに従う者は皆、呪われているからです。「律法の書に書かれているすべてのことを守り行わない者は皆呪われる」と書いてあるからです。しかし、

人は神の前に律法によって義と認められる、それは明らかです。なぜなら、義人は信仰によって生きるからです。(ガラテヤ3:10-11)

聖書は明確に述べています。律法の行いは、それを守る者に呪いをもたらすだけだからです。律法は決して義と認められることはありません。律法が要求するすべてのことを守りながら、一つでも罪を犯したなら、すべてにおいて罪を犯したことになるからです。神の前に義とされるには、恵みのうちに歩まなければなりません。そして、宗教的律法主義に縛られている世界中の大多数の信者にとって、恵みのうちに歩まない限り、律法によって義と認められることは決してありません。

第3章

イエスの名を信じて

「信じる」という言葉はギリシャ語で「ピステウオ」と発音され、「ピスト・ヨー・オ」と発音されます。これは、人や物に対して、あるいは物に対して「信仰を持つ」という意味です。特に、自分の霊的な存在をキリストに委ねることです。

信じるということは、人が恵みと真理を受けるためにできることのすべてを含みます。恵みと真理に関するすべては、神が最初に造られた「信じる」という言葉に含まれており、この言葉はヨハネによる福音書の中で様々な形で100回使われています。あなたはイエス様を信じますか。そうであれば、あなたには恵みと真理があります。信じるという姿勢によって、あなたは恵みと真理を持つこととなります。なぜなら、主イエス様を信じなければ、それらを得ることはできないからです。一方、名前は「セム」で、「恥」と発音され、名誉、権威、人格、名声、評判、報告を意味します。一方、イエス様の名前は、彼が何者であるか、そして彼が何をしたかと簡潔に表すことができます。したがって、イエス様の名前を信じることは、主イエス様についての、または主イエス様の名誉、権威、人格、名声、評判、報告を信じる、またはそれらに自分の霊的存在を委ねることを意味します。

彼は誰でしょうか？使徒ヨハネが答えを持っています。

そして、御言葉は肉となって、私たちの間に住まわれた。(私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、)恵みと真理に満ちていた。(ヨハネ1:14)

イエスは神の言葉が肉となり、恵みと真理に満ちておられます。イエスは何をなさったのでしょうか。使徒ヨハネは再びその答えを与えています。

その翌日、ヨハネはイエスが自分のところに来るのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」

(ヨハネ1:29)

彼はまた神の子羊であり、創世記から黙示録まで彼が成し遂げたことは、世の罪を取り除き、

彼を受け入れて光の中を歩む者には罪の宣告はありません。

イエスはご自分のところに来られたが、ご自分の民はイエスを受け入れなかった。しかし、イエスを受け入れた人々、すなわち、イエスの名を信じた人々には、神の子とされる権威をお与えになった。(ヨハネ1:11-12)

イエスはご自分の民のところに来られたが、彼らはイエスを拒絶した。しかしイエスを世の罪を取り除く神の小羊として受け入れた人々は、神の子となる力と権威を与えられた。

だから、わたしはあなたがたに言った。「あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろう。わたしがそれであるということ信じなければ、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろう。」(ヨハネ8:24)

イエスが彼らに告げているのは、イエスがどのような方であり、何をなさったのかを信じること、である。なぜならイエスは彼らの罪を取り除いてくださった神の子羊だからである。

これはユダヤ人である彼らにとって信じ難いことでした。なぜなら、彼らの習慣では、過越祭の時期には、エルサレムへ屠殺のために連れて行く子羊を、自分たちの罪を消し去ってくれるものとして大いに賛美するからです。彼らは、イエスが彼らの罪だけでなく、全世界の罪を消し去るために天から降りてきた真の神の子羊であることを知りませんでした。

わたしは世に光として来た。わたしを信じる者が一人も暗闇にとどまらないためである。わたしの言葉を聞いて信じない者があっても、わたしはその人を裁かない。わたしは世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者には、その人を裁く者がいる。わたしが語った言葉、その者が終りの日にその人を裁くであろう。(ヨハネ12:46-48)

イエスが人類を救うために光としてこの世に来られた時、世界は闇と邪悪の中でありました。ですから、もしあなたがイエスを恵みと真理として信じないなら、終わりの日にイエスの言葉があなたを裁くでしょう。

イエスは答えて彼らに言われた、「神が遣わした者を信じること、それが神のわざである。」(ヨハネ6:29)

律法の下では、すべてのことは行いを必要とします。イエスはここでユダヤ人に語りかけていました。律法の観点からこの言葉を見ると、イエスは彼らが行うべき行いは自分自身であると言っていたのです。

イエスは彼らに、しかし恵みのもとで、神が彼らのために働きを終えたので、他に何もする必要はない、ただイエスという恵みの完成された働きだけを信じればよい、と告げました。

しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じてイエスの名によって命を得るためである。(ヨハネ20:31)

聖書に書かれていることはすべて、イエスが神の御子であり、恵みと真理に満ちていること、そしてイエスを通して私たちが永遠の命を得ることができることを私たちに信じさせるために語られたのです。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。言は初めに神と共にあった。すべてのものは、言によって造られた。造られたもので、一つとしてこれによらないものはなかった。言には命があり、その命は人々の光であった。

(ヨハネ1:1-4)

この章の最初の4つの節は神自身について述べています。

イエス以外に命は存在しませんでした。イエスは被造物ではなく、創造主(万物を創造した方)です。だからこそ、私たちの人生において、あらゆるものにおいてイエスが最優先されるべきなのです。万物はイエスに従うべきです(コロサイ1:16参照)。存在するものはすべてイエスによって、そしてイエスのために創造されたものであり、この世のあらゆるものはイエスが、私をイエスが望む場所へと導くために用いられています。

聖書の中で、主イエスの神性について教えている書物は、ヨハネによる福音書以外にはありません。イエスに現れた神の命は、人の中にありました。これは、人の中にある光や神聖なものはすべて、その人の中にある神の命によるものであることを意味します。恵みは永遠の命にまで至りますが、モーセの律法はそうではありません。律法には命を与える力はありませんでした。

あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると証明できるのか。わたしが真実を語っているのに、なぜ信じないのか。(ヨハネ8:46)

地上のいかなる人間も、イエスがここで述べたようなことを言うことはできません。なぜなら、イエスは神だからです。イエスは罪を超越した存在であり、愛そのものです。

彼は罪のない者としてこの世を歩み、誰も

イエスはいかなる罪も犯さず、モーセの律法で求められているすべてのことを守られました（マタイ5:17参照）。

律法に従う者が相続人となるなら、信仰はむなしく、約束は無効になります。なぜなら、律法は怒りを生じさせるからです。律法のないところには違反はありません。ですから、それは信仰によるのです。それは恵みによるものであり、約束がすべての子孫に確実に与えられるためです。律法に従う者だけでなく、私たちすべての父祖であるアブラハムの信仰に従う者にも、約束が確実に与えられるためです。

（ローマ4:14-16）

パウロが信仰について書いたとき、彼は特に私たちの主イエス・キリストの復活への信仰、すなわち義について言及していました。聖書の中で他の人々が語っている信仰は、パウロが書いた信仰と同じではありません。パウロは恵みと真理の啓示を受け、それに従って歩み、神の恵みによって召された異邦人の目を開くために遣わされました。命は神の名によって与えられます。そして、神の名とは、神そのもの、そして神の行いそのものなのです。

イエス・キリストの功績は恵みの基盤です。律法と恵みの対比を見失うことは、ヨハネによる福音書の中で聖霊によって与えられた明確なメッセージを見失うことになります。

わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。あるいは、わたしの業そのもののゆえに信じなさい。まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行い業を行うでしょう。また、それよりもさらに大きな業を行うでしょう。わたしが父のもとに行くからです。

（ヨハネ14:11-12）

これは、主イエスが、ご自身が誰であるか、何をなさったかを信じ、恵みと真理のうちを歩むことに同意するすべての人に与えられた、白紙の、あるいは開封されていない小切手です。多くの人が、主が「わたしは父のもとに行くから」と言われた理由について疑問を抱いています。この疑問に答えるには、主が地上におられた当時、主と父なる神との間に仲介者がいなかったことを指摘することが重要です。誰もその隙間を埋めて、主が十字架に行かないように執り成すことはできませんでした。アダムの罪によって、私たちは皆罪人となったため、誰も義と認められなかったからです。しかし、主は「わたしは父のもとに行くから」と述べ、ご自身が

イエスは人類と神の間に仲介者として立ち、イエスの名を信じる者は皆、イエスの名によって父に願いを求めるなら、イエスはそれを成し遂げてくださると教えられました。そして、イエスが仲介者としてその隙間を埋めることにより、私たちはイエスよりも偉大な業を成し遂げることができるのです。なぜなら、父なる神の御座の部屋にあるイエスの血を通して、イエスは私たちを常に神の御前に聖なる者、非難されるところのない者、責められるところのない者として示してくださるからです（コロサイ1:22参照）。

あなたたちは互いに誉れを受けながら、神のみからの誉れを求めないのに、どうして信じていることができるでしょう。（ヨハネ5:44）

主イエスを恵みと真理の使者として信じる人は、決して自分の名誉を求めたり、人々が自分に注目を集めたり栄光を授けたりすることを許しません。なぜでしょうか？それは、真の恵みの姿勢が常に人々をイエスに向けさせるからです。

恵みと真理は、神への完全な依存を引き起こします。そして、イエスと、イエスを通して与えられた恵みは、父なる神の満ち満ちた姿となるのです。人間には栄光を独占したり、誉れを受けたりするための権利は一切ありません。なぜなら、回復の御業は神によって構想され、神によって始められ、神によって完成されたからです。人間に求められるのは、その完成された御業に完全に依存することだけです。いかなる種類の自己努力、人間の業績、能力、成果にもとづく行動は、人々の注意を自分自身に向けることであり、それによってイエスがあなたの罪を取り除いていないことを示すこととなります。そして、それはあなたを暗闇と盲目の中に留まらせ、あなたの罪をあなたの戸口に留めておくこととなります。

もしあなたがたがモーセを信じていたなら、わたしを信じたであろう。モーセはわたしについて書いたのだから。しかし、もしあなたがたがモーセの書いたものを信じないなら、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか。（ヨハネ5:46-47）

この聖句におけるモーセは律法を象徴しており、主がこれを語られたのは、律法が真の教師であり、それを熱心に守る者を恵みと真理の使者である主に導く存在であることを示すためでした。これはまた、モーセの書の中で、ユダヤ人が申命記18章18-19節に記されているように、主イエスの来臨について預言的に告げられていたにもかかわらず、彼らが律法に従わなかったため、恵みと真理の使者について多くを知ることができなかったことを示しています。

しかし、もしわたしたちの福音が隠されているとすれば、それは滅びる者たちに隠されているのです。この世の神が信じない者たちの心を暗くし、神のかたちであるキリストの栄光ある福音の光が彼らに届かないようにしたのです。(II コリント4:3-4)

この世の神は、神の名を信じない（つまり、神が誰であるか、そして神が何をしたかを信じない）人々の心を盲目にします。

キリストの福音は、その名を信じない人々にも隠されます。これは、キリストを恵みと真理の使者として受け入れない人々はすでに失われており、福音の光に照らされて回心することができないことを意味します。

先生方、救われるためには何をすればよいのでしょうか？彼らは言いました、「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
(使徒行伝16:30-31)

救いは、イエスの御名を信じることによるのみ得られます。イエスの御名を唯一の道、唯一の真理、唯一の命として信じる以外に、人が救われる道も、解放される道も、父なる神に近づく道もありません。

主は言われる。「あなたたちはわたしの証人、わたしが選んだ僕である。あなたたちはわたしを知り、わたしを信じ、わたしこそ神であることを理解するためである。わたしの前に神は造られず、わたしの後にも神はいないであろう。」(イザヤ43:10)

主は恵みを通して私たちが主の証人、主の僕として選んでくださいました。それは、私たちが主の御名を知り、信じ、主が恵みと真理の使者であることを理解するためです。恵みと真理に勝るものはなく、それは創造の始まりであり終わりです。恵みの前には何も創造されず、恵みの後にも、人を義と認めるものは何もありません。

また、わたしを信じるこれらの幼子たちの一人でもつまずかせる者は、その首に石臼をかけられて海に投げ込まれた方がましである。(マルコ9:42)

「つまづかせる」という言葉はギリシャ語で「スカンダリゾー」と言い、これは「スキャンダルにする」「罨にかける」「つまづかせる」「つまづかせる」「罪、背教、不快感に誘い込む」という意味です。私は時間をかけて「つまづかせる」という言葉の聖書的な意味を明らかにし、主イエスを恵みと真理の使者として信じる人々を罪に誘い込むだけでなく、恵みと真理の道を歩んでいる彼らを攻撃することに喜びを見出している人々に警告しました。主は、これは踏み込むには非常に危険な領域であると警告されました。なぜなら、神の民をつまづかせるものはすべて厳しく罰せられるからです。

それゆえ、聖書にはこう書いてあります。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い隅の親石を置く。これを信じる者は、恥じ入ることがない。」(ペテロ第一 2:7)

聖書は、イエスがどのような方であるかを明確に述べています。イエスは隅の親石であり、父の選民であり、神の尊い子であり、シオンに置かれた恵みと真理の奉仕者であり、この世の体制の一部ではないからです。

もしあなたが主の御名を信じ、主にとどまり、主に歩むなら、あなたは決して打ちひしがれることはありません。「打ちひしがれる」という言葉は、混乱させられる、恥辱を受ける、不名誉に晒される、恥をかかされるという意味です。恵みと真理の使者である主の御名を信じない者は、打ちひしがれ、つまづき、選ばれることはありません。

第4章

サマリア人との違い
女性とニコデモの関係
律法と恵みの違い

ニコデモとは誰だったのでしょうか。使徒ヨハネはその書の第3章でその答えを述べています。

パリサイ人の中に、ユダヤ人の指導者でニコデモという人がいました。彼は夜、イエスのもとに来て言いました。「ラビ、私たちはあなたが神から来られた教師であることを知っています。神が共にいない限り、あなたがなさるような奇跡は、だれにもできないからです。」

(ヨハネ3:1-2)

ニコデモはユダヤ人であり、パリサイ人であり、ユダヤ人の指導者でもありましたが、後に主イエスの弟子となりました。イエスの死後、イエスに没薬とアロエを塗り、アリマタヤのヨセフと共にイエスの埋葬に携わったのもこのニコデモです(ヨハネ19:38-42参照)。ニコデモが「ラビ、私たちはあなたが神から来られた教師であることを知っています」と言ったのは、イエスが神から来られたこと、つまり神から遣わされたのではないことを知らなかったため、嘘をついていたのです。

ニコデモが夜にイエスのもとに来たということは、彼が霊的な理解力に欠けていたことを意味します。だからこそイエスは彼に、「あなたが見ていると言ったものは、あなたには見えていない。もし見えるなら、夜に来るはずがない」と言いました。

モーセのようではありませんでした。モーセは顔にベールをかけ、イスラエルの子らが廃止されたものの終わりをしっかりと見通すことができなかったのです。しかし、彼らの心は盲目にされました。なぜなら、今日に至るまで、旧約聖書を読むとき、同じベールが取り除かれていないからです。そのベールはキリストにおいて取り除かれました。しかし、今日に至るまで、モーセ(律法)が読まれるとき、彼らの心にはベールがかかっています。

しかし、主の方を向くと、その覆いは取り去られるであろう。(II コリント 3:13-16)

律法の下に歩む者は皆、心にベールをかぶせており、そのために霊的に盲目になっているが、そのベールは取り除かれる。

恵みと真理の使者である主イエスに目を向けると、すぐにその場を立ち去ってしまいます。ニコデモは霊的に顔にベールをかぶせていたため、死刑宣告を受けていました。だからこそ彼は夜に来たのです。

律法が何を言っているかは、律法の下にある者たちに言っているのだと、私たちは知っています。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神の前に罪人となるためです。ですから、律法の行いによっては、神の前に義と認められる人は一人もいません。律法によって罪を知るようになるからです。(ローマ3:19-20)

こうして、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り、こうして死がすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。律法が与えられるまでは罪は世にありました。しかし、律法がなければ罪は認められません。(ローマ5:12-13)

律法は誰かを義とするためのものではありません。なぜなら、一人に罪を犯したから、すべてに罪を犯したからです。律法がこの世に許されたのは、人が神の戒めに従えないことを示して、神の前に有罪とするためでした。罪は一人の人、アダムを通してこの世に入り、その罪に対する罰として死がすべての人に及びました。しかし、律法がなければ罪は存在しなかったでしょう。なぜなら、律法は罪の啓示だからです。したがって、これら二つの聖句は、ニコデモがイエスのもともと来たとき、彼は死刑を宣告されており、恵みを受ける前にベールを取り外す必要があったことを示しています。今日、新生したクリスチャンのほとんどは、ある宗派の法律や、神の言葉に反するこの世のシステムの法律に縛られているため、顔にベールをかぶっています。

恵みと真理の中を歩む神の牧師が説教するためにどこかへ行くとき、人々が知りたいのは、「どのようにしてイエスを知るようになるのか？」ということです。なぜでしょうか？それは、イエスを人類への神の豊かな恵みとして受け入れるなら、彼らは罪の咎めの下にはいないからです。

イエスは答えて言われた、「よくよくあなたに告げます。人は新しく生まれなければ、神の王国を見ることはできません。」
(ヨハネ3:3)

律法に対する恵みと真理の唯一の答えは、あなたが新しく生まれなければならないということです。神の国とは、この世における神の恵みの支配であり、旧約聖書の預言者たちが預言した未来の時代です。それはまた、神の国が経験したような祝福の経験でもあります。

エデンの園、そこは悪が完全に克服され、その王国に住む人々が幸福と平和と喜びだけを知る場所です。

神の王国を見ることができないということは、自分の中で神の王国のライフスタイルを体験することも、神の王国の物理的な顕現を見ることもできないことを意味します。

他人の妻と姦通する男、すなわち隣人の妻と姦通する男は、姦通した男も姦通した女も必ず死刑に処せられなければならない。

(レビ記20:10)

女は答えて言った。「夫はいません」。イエスは言われた。「『夫はいません』とあなたが言ったのはもっともだ。あなたには五人の夫がいたが、今の夫はあなたの夫ではない。その言葉は真実である。」(ヨハネ4:17-18)

レビ記のこの章と節では、この女性は石打ちにされていたことが示されています。実際、もし彼女がユダヤ人であったなら、石打ちにされていたでしょう。しかし、サマリア人は神の律法に従って歩いていませんでした。彼らは偽りの神を崇拝していたのです。ですから、これはイエスが彼女を恵みによって扱い、非難しなかったことを示しています。イエスが彼女に「あなたには夫がいません」と言ったとき、離婚は神に対する重大な罪であるにもかかわらず、イエスはこの女性の離婚を認めたのです。イエスは彼女を非難せず、むしろ生ける水（恵み）を彼女に提供しました。生ける水とは、永遠の命へとわき出る泉です。この女性には人間としての功績はほとんど、あるいは全くありませんでした。彼女は自分の霊的な状態さえ知りませんでした。彼女は自分が失われ、地獄へ向かっていること、そして5人の夫がいたことを知りませんでした。

ニコデモはこれらすべてを知っていたため、老齢になってから生まれ変わることを信じるのが難しかったのです。彼はサマリアの女ほど恵みと真理を受け入れる準備ができていませんでした。彼は大きな功績を持っていました。彼は律法学者であり、パリサイ人であり、

知的な人。人間としての功績や知性が高ければ高いほど、イエスの単純さを受け入れるのは難しくなります。

すると、サマリアの女はイエスに言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に水を飲ませてほしいとおっしゃるのですか。」

ユダヤ人はサマリア人とは交際をしていなかったからである。(ヨハネ4:9)

彼女は自分の限られた理解力で、イエスを律法の下に置くために全力を尽くしました。イエスがニコデモに生ける水を与えなかったのは、イエスの啓示がニコデモには大きすぎて理解できなかったからです。知識人であったニコデモは、人間の功績による命という律法的な考えにとらわれていました。無償の賜物としての命は、彼にとって理解しがたいものだったでしょう。律法主義（行い）と独善は、人間の功績によらない恵みによる永遠の命の受け入れを妨げます。生ける水による永遠の命は、心のあらゆる願いを満たすものでもあり、律法の要求を満たそうとする努力とは相容れません。女性の知性では生ける水の真理の意味を理解できませんでしたが、彼女は純粋な信仰によってそれを掴みました。

女性がグレースに興味を持ったこと

サマリアの女が恵みについて真に興味を抱いたのは、その賜物の無償性、永遠に満たされる揺るぎない力、そして永遠の命を自らの中から生み出す力でした。主が私に望まれることを行うのに、私は人間の能力を必要としません。しかし、ニコデモは人間の能力に頼りました。なぜなら、律法が要求したのは行い（人間の能力）だけだったからです。この女はこの真理を、知性や行いによってではなく、純粋な信仰によって理解したのです。信仰は知性（つまり、頭脳）ではなく、心の問題なのです。

人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからです。(ローマ10:10)

ここで主なる聖霊は使徒パウロの口を通して、信仰は頭ではなく心によるものであると明確に語られました。

その女性は、自分の罪深い状態を改め、神に完全に依存していることを認めることで、神の恵みと完全に調和していました。

女はイエスに言った。「先生、私はあなたが預言者であることを知っています。」

(ヨハネ4:19)

彼女は主イエスを預言者として受け入れました。なぜなら、イエスが自分に提供して下さっているものが
必要だと分かっていたにもかかわらず、それを与えることができなかったからです。

彼女は生ける水を望み、それを求め、それを得るための条件を受け入れました。

あなたの神、主が御名を置くために選ばれる場所がそこにある。そこに、わたしが命じるすべてのもの、すなわち、あなたの燔祭、あなたの犠牲、あなたの十分の一献金、あなたの手による奉納物、そしてあなたが主に誓うすべての選びの誓願を携えて来なければならない。そして、あなたの神、主の前に、あなたの息子、娘、あなたの男奴隷、あなたの女奴隷、そしてあなたの町の内にいるレビ人と共に喜び祝わなければならない。彼はあなたと共に相続地も受け継ぐ土地も持っていないからである。

あなたは、目につくあらゆる場所で燔祭をささげてはならない。ただ、主があなたの部族の一つに選ばれる場所で、燔祭をささげなければならない。そして、わたしが命じるすべてのことを、そこで行わなければならない。(申命記12:11-14)

律法のもとでは、神は礼拝のための特定の場所を持っていました。神がそれを要求し、律法もまたそれを要求しました。なぜなら、当時、神の恵みは教会にまだ啓示されておらず、恵みの霊もまだ来ていなかったからです。だからこそ、キリスト教世界の大多数は大きな欺瞞に陥っているのです。彼らは、特定の場所で父なる神を礼拝するという神の要求が、律法のもとでの神の戒めであったという事実を知らないからです。ですから、キリスト教徒の家族は、恵みを通して神に召されたにもかかわらず、定められた場所で神を礼拝することで律法を守るために立ち返ることは、律法の呪いと大きな束縛へと導くということに気づいていません。律法の下にあるなら、律法が要求するすべてのことを守らなければならないというのは事実です。あることを守りながら、あることを犯すなら、あなたは

すべての人は罪を犯したのであり、したがって法律に従わない人々と同じ罰を受けるべきである。

わたしたちの先祖はこの山で礼拝しました。あなた方はエルサレムこそ礼拝すべき場所だと言います。イエスはこう言われました。

彼女に、女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたがこの山でもエルサレムでもないところで、父を礼拝する時が来ます。――

あなた方は何を礼拝しているのか知らないが、私たちは何を礼拝しているのか知っている。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、真の礼拝者が霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。そして今がその時である。父はそのような礼拝者を求めておられるからである。(ヨハネ 4:20-23)

イエスは、「時が来る。今がその時だ」と言われました。これは、イエスがイスラエルに足を踏み入れた時から神殿での礼拝が終わったことを意味します。なぜなら、イエスこそが、人々が犠牲を捧げるべき真の神殿だからです。だからこそ、イエスは彼らに、父なる神を礼拝するためにエルサレムに行く必要はなく、どこにいても、霊と真理をもって礼拝できると告げたのです。

イエスは、父なる神を霊と真理をもって礼拝するようにと語り、儀式的な礼拝と、ユダヤ人が神の真の礼拝者であるという考えを終わらせ、神は恵みと真理を受け入れた者からのみ礼拝を受けるという事実を確立しました。さらにイエスは、山やエルサレム（組織化された特定の場所で神を礼拝することの模倣）に行く人々は、自分が何を礼拝しているのかわかっていないと語りました。なぜでしょうか？それは、主の臨在がもはやそこにはないため、そこで礼拝されているのは神を代表しない別の人格だからです。

さあ、見なさい。わたしのしたことをすべて言い当てた人がいます。この人がキリストではないか。(ヨハネ4:29)

女性はイエスの言葉を信じて、イエスをキリストとして受け入れました。イエスは彼女に奇跡を起こされたわけではありません。恵みの偉大さは決して見逃しません。恵みは、必要な時に必要なことを行います。もしイエスが、高潔で評判の良い女性に話しかけていたら、結果は得られなかったでしょう。なぜなら、高潔な女性は、この罪深い女性と同じ評判を持っていなかったからです。サマリアの女は非常に悪い評判で、誰も彼女に話しかける気はありませんでした。そのため、彼女は一人で留まりました。そして、彼女が水を汲みに出てきたのは、特に女性が誰も水を汲みに来ない真昼間でした。彼女は誰の注目も集めなくなかったのです。だからこそ、彼女はイエスを避け続けたのです。

イエスが彼女と会話を始めた時、彼女は町に逃げ帰りましたが、仲間の女たちのところには行きませんでした。軽蔑されるからです。彼女は町の男たちに自分の話を語りました。そして、彼女の悪い評判のおかげで、話した人たちの注意を引くことができませんでした。ここで学ぶべき大きな教訓は、世俗的な評判を持つ人、あるいは聖文を知っていると信じている人の大多数が、自分の人間的な功績にあまりにも頼りすぎているために、自分の罪を認めることや救いが必要であることを信じるのが難しいということです。そのため、彼らはキリストの単純さを受け入れることが非常に難しいのです。

そこでサマリア人たちはイエスのもとに来て、一緒に滞在して欲しいと頼んだので、イエスはそこに二日間滞在した。

(ヨハネ4:40)

イエスがサマリアで彼らと滞在した二日間は、恵みの期間の二千年を表しています。

しかし、そこには律法学者たちが座って、「なぜこの人はこのように神を冒瀆するのですか。神以外に誰が罪を赦すことができるでしょうか。」(マルコ2:6-7)

そこで、パリサイ人たちは出かけて行って、どのようにしてイエスを言葉で惑わそうかと相談した。(マタイ22:15)

人間の推論は、神の働きを殺すので、悪魔のものです。

パリサイ人たちが議論を交わすたびに、彼らの意図はイエスを死刑にすることでした。神の知恵は人間とは無関係であり、聖霊によってのみもたらされます。神は私を、私の能力ゆえに召されたのではなく、私の無能ゆえに召されたのです。それは、私が神に頼れるようにするためでした。ニコデモは人間の知恵、つまりこの世の知恵を持っており、それが聖霊の働きを妨げていました。聖霊なしには、誰も神の知識を得ることはできません。だからこそイエスはニコデモに、彼が持っていた人間の知恵を忘れ、生まれ変わるように言われたのです。水（神の言葉）と聖霊（神の霊に導かれて）によって真に生まれたときのみ、神とその知恵を知ることができるのです。

第5章

恵みによって律法の無力さから救い出すことは可能でしょうか？

さて、エルサレムの羊市場のそばに、ヘブライ語でベテスタと呼ばれる池があり、そこには五つの廊下がありました。そこには、盲人、足の不自由な人、体の弱い人など、大勢の人々が横たわり、水が動くのを待っていました（ヨハネ5:2-3）。

無力という言葉はギリシャ語で「アステネオ」で、虚弱、病氣、弱くなるという意味です。一方、ベテスタは慈悲の家、あるいは慈愛の家を意味し、5つの玄関は恵みを表します。5は恵みを意味するからです。ここにいる病人たちは、律法が命を与えなかったこと、律法が神の愛の慈しみを示せなかったことを象徴しています。彼らは律法の要求を満たす力がなく、恵みの中にいたにもかかわらず、恵みを求めることができませんでした。

というのは、ある時、御使いが池に降りて来て、水を動かすと、水が動いた後に最初に池に入った者は、どんな病氣にかかっていたにも癒されたからである。

そこに三十八年間も病氣を患っている人がいました。イエスは彼が横たわっているのを見て、もう長い間病氣になっていることを知って、「治りたいですか」とおっしゃいました。すると、病人は答えました。「主よ、水が動く時、私を池に入れてくれる人がいません。私が入ろうとすると、別の人が先に降りて行きます。」（ヨハネ5:4-7）

障がい者は、律法の行いや自分の能力に頼っていたため、それまで癒やしを受けることができませんでした。彼は38年間、神ではなく自分自身に頼っていました。38という数字は、神の数え方では「義」ですが、障がい者は信仰によって得られる神の義ではなく、自分の義、つまり律法の行いに頼っていました。そして、彼には

当時の律法が要求していたこと、つまり天使にかき乱された後に最初に水に入る者となるために必要な力も持たなかったために、イエスは神に逆らって38年間の人間としての力を無駄にしてしまったのです。水がかき乱された時に私を池に入れてくれる人がいない、と言うことは、今日のキリスト教世界では、彼には後を追う人や牧師がいない、と言っているようなものです。信者たちは神への崇拝を非常に体系化しているので、人は新しく生まれた時、神の言葉を教えてくれる、いわゆる「後を追う」ために自分のもとに来る兄弟姉妹が割り当てられるのを待ちます。神に従い仕えるために誰かが自分を後押ししてくれるのを待っているのです。これが、今日、自称キリスト教世界に不道德と怠惰と霊的なまどろみが多すぎる理由です。なぜでしょうか?なぜなら、同じ教派の兄弟たちに見守られている人の多くが、自分たちが兄弟たちや教派のために走っていると思い込み、結局は背教してしまうからです。そして、彼ら（兄弟たち）が若い改宗者たちを喜ばせることをやめてしまうと、指導者たちはもう自分たちに興味を持っていないと思い込み、ただ背教してしまうのです。しかし、もし彼ら（これらの改宗者）が主イエス・キリストを恵みと真理の奉仕者として示され、強制されることなく主に従うことを許されていたなら、彼らは主を神の義として受け入れ、また、主を霊と真理で従うために豊かな恵みを受け、使徒ヨハネの次の神の言葉を理解できたはずでした。「しかし、あなたがたは、彼から受けた注ぎの油が、あなたがたのうちにとどまっており、だれからも教えを受ける必要はありません。その注ぎの油がすべてのことを教えているように、あなたがたは彼のうちにとどまるのです。それは真理であって、偽りではありません。その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたは彼のうちにとどまるべきです」（ヨハネの手紙一 2:27）

恵みと真理の油注ぎを受けるなら、神に仕えるよう誰かに押し付けられたり、神の恵みが自分のためにしてくださるはずのことを誰かにやってもらおうと何年も無駄にしていた無力な人のように、誰かに追いかけられたりする必要はありません。しかし、同じ油注ぎは、あなたが恵みと真理の中を歩み、主イエスによってすでに与えられている神の義に頼る助けとなるでしょう。

神の恵みの中を歩むことに同意する者たちのために。神の恵みと救済の力に頼らなかったために、神はイスラエルの兵士たちの破滅を許したのです。ここに見られるように。

そして、私たちがカデシュ・バルネアからゼレデ川を渡るまでの期間は38年であり、主が彼らに誓われたとおり、軍勢の中からすべての戦士が死に絶えるまでであった。(申命記 2:14)

これは、イスラエルが38年間、神の力を信じず、約束の地へ導いてくれなかったために、何も成し遂げられなかったことを示しています。彼らは自らの力、能力、そして義を信じすぎていました。そのため、神は彼らが人間的資源をすべて浪費することを許し、彼らが頼りにしていた義が望むものを得られないまで放置しました。そして今日、クリスチャン家庭は、多くの宗派の戒律を守ろうと、あるいは遵守しようと努力することで、力を無駄にしています。しかし、それらは彼らに利益をもたらすことも、恵みによって得られる神の義を得る助けにもなりません。

そこでユダヤ人たちは、病気を治してもらった人に言った。「今日は安息日だ。床を運ぶことは許されていない。」(ヨハネ5:10)

あなたがたは、わたしがエジプト人に対してしたこと、また、わたしがあなたがたを鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れてきたことを見た。(出エジプト記19:4)

神は彼らに、ご自身が何をなさったかを思い出させなければなりません。なぜなら、彼らはそれを忘れていたからです。ユダヤ人たちも同じで、彼らは誰がその人を癒したのか尋ねませんでした。彼らの目は神ではなく、安息日に向けられていたのです。

彼らは神とその善行よりも、自分たちの律法や計画に関心を抱いていました。これが今日のキリスト教世界の現状です。クリスチャンの家族は、あなたがどの宗派に属しているか、そしてその宗派の律法をどのように守っているかにのみ関心を持ち、霊と真理をもって神を礼拝し、神の言葉に従う方法を探ろうとはしません。また、ヨハネによる福音書5章10節にあるユダヤ人の反応を見ると、律法主義、つまり律法は常に恵みを裁くことがはっきりと分かります。あなたが恵みの中を歩む瞬間、律法に浸され、埋もれている者たちは、あの無力な人に対してしたように、あなたに立ち向かうでしょう。

すると、その人はたちまち癒され、床を取り上げて歩き出した。その日は安息日であった。
(ヨハネ5:9)

これは神の恵みの現れです。律法が38年間その無力さゆえに成し遂げられなかったことを、神の恵みは、安息日を深く尊んでいたユダヤ人たちの無念をよそに、わずか数分のうちに成し遂げたのです。

イスラエルの人々が荒野にいたとき、安息日にたきぎを集めている男を見つけた。たきぎを集めている彼を見つけた人々は、彼をモーセとアロン、そして全会衆のもとに連れて行った。彼らは彼を牢に入れた。彼にどうすべきか、まだ定められていなかったからである。主はモーセに言われた。「その人は必ず殺されなければならない。全会衆は宿営の外で彼を石で打ち殺さなければならない。」全会衆は彼を宿営の外に連れて行き、石で打ち殺した。主がモーセに命じられたとおり、彼は死んだ。

(民数記15:32-36)。

律法の無力さはあまりにも大きく、律法の下には慈悲がありませんでした。しかし、イスラエル人は律法を守っていませんでした。そうでなければ、あの男は安息日に薪を集めに行くことはできなかったでしょう。新約聖書では、旧約聖書のイスラエルの民のように律法を守ることができなかったパリサイ人やユダヤ人が、この障害者に床を担いで癒された後も起き上がらせないように強要し、主イエスを火で脅しました。

そこで、ユダヤ人たちは、イエスが安息日にこのような事を行ったので、イエスを迫害し、殺そうとした。

(ヨハネ5:16)

彼らは、イエスが彼らの律法に反する行為を行ったため、真剣にイエスを殺そうとしていました。イエスがどんな奇跡を起こされても、律法に関して彼らの心を変えることはできませんでした。

したがって、律法主義が恵みに対抗する最終的な答えは死であることを示しています。彼らは、あなたが彼らの律法に従わなければ、あなたの信頼を失わせるためにあらゆる手段を講じます。なぜなら、律法に関するすべては人間の能力と死の働きによるものだからです。

律法全体を守ったとしても、一つの点に違反する者は、すべてに対して有罪となるからです。(ヤコブ2:10)

これは、行為と人間の努力における死の奉仕を示しています。

どれほど律法を守ろうと努力しても、一度でも律法の一つに罪を犯したら、すべてに失敗したことになります。これは、律法が、律法を信頼する者を助けたり、義としたりできないことの証拠です。

しかし、イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今も働いておられる。だからわたしも働くのだ。」(ヨハネ5:17)

イエスは、マタイ伝12章10~12節に見られるように、安息日に行った行為を恵みのもとで擁護するのではなく、律法のもとで安息日に病人を癒すことを擁護したことを示すために、ユダヤ人たちにこのように答えました。

律法の無力さと恵みの救済力は、主イエスと姦淫の罪で捕らえられた女性、律法学者、パリサイ人との出会いの中にさらに見ることができます。

すると、律法学者、パリサイ人たちが、姦淫の現場で捕まった女をイエスのもとに連れて来て、真ん中に立たせ、こう言った。「先生、この女は姦淫の現場で捕まりました。」

モーセは律法の中で、このような者を石打ちにするよう命じています。しかし、あなたは何と言うのですか。彼らはイエスを試みて、訴えてみようと、こう言いました。しかしイエスは身をかがめて、指で地面に何かを書き始め、まるで彼らの言うことを聞いていないかのようでした。彼らが問い続けるので、イエスは起き上がって言われた。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げなさい。」そして、もう一度身をかがめて地面に何かを書き始めた。これを聞いた人々は良心の呵責を感じ、年長者から始めて一人ずつ出て行き、イエスと女だけが真ん中に残されました。(ヨハネ8:3-11)

律法の下では、この女性は石打ちにされるべきでしたが、彼らは彼女を恵みと真理の使者であるイエスのもとに連れて行きました。そして神の恵みは罪の宣告を取り除き、彼女を罪に定めませんでした。律法学者とパリサイ人は人間の視点から女性を見ていましたが、恵みと真理に満ちたイエスは神の視点から女性を見ました。恵みと真理の中を歩むイエスは、

真理は人を非難したり裁いたりするのではなく、イエスが説く真理こそが人を非難したり裁いたりするのです。イエスは律法学者やパリサイ人に真理を示しましたが、彼らは真理に耐えられず、皆立ち去りました。

イエスはこの十二人を遣わし、彼らに命じて言われた。「異邦人の道に行くな。サマリア人の町には、入るな。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。」(マタイ10:5-6)

しかし、聖霊があなたがたに臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤ全土、サマリア、および地の果てにまで、わたしの証人となります。(使徒行伝 1:8)

イエスはユダヤを去り、再びガリラヤへ行き、サマリアを通過して、サマリアのスカルという町に着かれた。そこはヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあった。(ヨハネ4:3-5)

マタイは福音書の中で、イエスが律法の下に歩んでいることを示し、弟子たちにサマリア人の町に行くなと命じることで、律法の無力さを明らかにしました。これは二つの理由によるものです。一つはサマリア人がユダヤ人と交渉を持っていなかったこと、もう一つは律法が弟子たちの心にまだ定着していなかったことです。しかし、ヨハネは福音書の中で恵みと真理の啓示を記し、弟子たちが恵みの象徴であるイエスと共にサマリアへ歩んだ様子を示しました。これは、彼らが恵みと真理の下に歩んだ時、いかなる罪にも陥ることなくサマリアへ行くことができたことを意味します。ルカもまた使徒言行録の中で、イエスが弟子たちに、律法が彼らの中で成就したことの証拠として恵みの霊を受ける時、エルサレム、ユダヤ全土、サマリア、そして地の果てに至るまで、イエスの証人となるであろうと教えたことを記しています。律法は、その無力さゆえに、生み出すことのできないものを要求しましたが、恵みは律法の無力さから救い出す恵みの能力を示すために律法を備え、彼らはサマリアで効果的に証しし、また非難されるところもありませんでした。

すると、その地方からひとりのカナンの女が出て来て、イエスに叫び求めた。「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊につかえているのです。」しかしイエスは、ひと言もお答えにならなかった。弟子たちが近寄ってきて、「娘を帰してください。わたしたちの後を追って泣き叫んでいるのです」と願い求めた。しかしイエスは答えて言われた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにつかわされたのではなく、わたしを遣わされたのです」。すると女は近寄ってきて、イエスを拝み、「主よ、わたしをお助けください」と祈った。イエスは答えて言われた。「子供たちのパンを取って小犬に投げ与えるのは、よくないことです。」女は言った。「主よ、そのとおりです。小犬も主人の食卓から落ちるパンくずは食べます。」

するとイエスは答えて言われた。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの望みどおりになりますように。」すると、娘はその瞬間から癒された。(マタイ15:22-28)

女が「主よ、ダビデの子よ」と口にした時、彼女はユダヤ人の女を装っていたため罪を犯していました。当時のユダヤ人だけが、イエスの系図をよく知っていたので、イエスをこのように呼ぶことができました。イエスが彼女にこのように語ったのは、律法を擁護するためであり、また彼女の偽善的な振る舞いを暴くためでもありました。彼女はすぐに悔い改め、恵みを通してそれを求めました。そして、恵みは彼女が求めたものをもたらしたのです。律法のもとでは、彼女のあらゆる嘆願と粘り強さにもかかわらず得られなかったものを、彼女は恵みのもとで手に入れました。これは、律法が慈悲深く、救い出すことができないことを示しています。主イエスは、救いの門が開かれて異邦人を迎える前に、イスラエルの失われた羊を回復させるために遣わされました。そして、その恵みの門が開かれるまでのほぼ3年半の間、この異邦人の女は、律法では決して得られなかったものを受け取っていました。なぜでしょうか。それは、律法が成し遂げられなかったところに、恵みが常に救いを与えてくれるからです。彼女は律法を通して自分の心の望みをかなえようと欺瞞的に試みましたが、失敗したとき、恵みに頼りました。なぜなら、恵みは決して失われないからです。

第6章

世と対照的な言葉

言葉とは、ある人から別の人へと完全な考えを伝える表現、あるいは考えや思考のことです。それは、イエス・キリストの絶対的、永遠的、そして究極の存在を表現する神学的な表現です。

それは神がご自身を知らせ、その意志を宣言し、その目的を成し遂げる手段でもあります。

初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。(ヨハネ1:1)

ここにあるいくつかの言葉は、私たちに神の完全な啓示を与えてくれるでしょう。人間は神の啓示を受けることができた。なぜなら、神は言葉が肉となって肉に現れたからである。

このようにして人は知り、人は信じ、人は命に立ち返るのです。律法は人に神を明らかにすることができませんでした。パリサイ人は律法を知っていましたが、神を知りませんでした。なぜでしょうか。これは、律法の中に神の愛の啓示がなかったからです。律法が石に刻まれ、書かれていたことは、律法に命を与える能力がないことの象徴です。一方、世界とはギリシヤ語のコスモスで、いくつかの事物、出来事などが整えられた、あるいはリストに載せられた秩序ある方法、何かが第一、第二、第三などであることを示すことを意味します。それは神がこの地上で機能するように定めた、整然としたシステムまたはプログラムであり、天上でも神が整えたものと同等です。

神が被造物に対して抱くこの善意によって、私たちは主の祈り「御国が来ますように。御心が天で行われるとおり、地にも行われますように」(マタイ 6:9-10)の真価を理解し始めることができるのです。

私たちが来てほしいと祈る主の王国とは、人間の墮落以前のエデンの園で部分的に実践されていた主の統治制度です。この制度を運営するために必要な力、つまり権威は、主イエス・キリストが地上におられた時に示されました。キリストは真にすべての被造物の上に君臨しておられました。

神の命令です。神が地上で成就することを望む御心は、神と天の御霊の生き方です。神は人類と地上の他の被造物が、天で定められた生き方と同じ生き方を、まさにこの地上で生きることを望んでおられます。この章をより明確に理解するために、この言葉と世界との対比は、地球を創造した神の言葉と、世界で機能しているシステムとの比較が全く異なることを示しています。

信仰を通して、私たちは世界が神の言葉によって形作られ、見えるものは現れるものから作られたのではないことを理解します（ヘブライ11:3）。

物質世界は神の言葉を通して創造されましたが、人間が神の栄光（恵み）から墮落し、エデンの園から追放されて以来、世界で機能しているシステムは、サタンによって築かれたものです。悪魔は、人間を狂気に陥れ、神とその道を完全に忘れさせようとする無駄な努力の中で、人類、ひいては創造物全体に、神秘のバビロンの精神を注入しました。

多くの人が聖書でこの「ミステリー・バビロン」という言葉を読んでも、人類や創造がどのようにしてこの言葉に至ったのか理解できないので、この言葉について説明させてください。ミステリーという言葉はギリシャ語で「ムステリオン」と言い、秘密や神秘（宗教儀式への入会によって課せられる沈黙の概念を通して）を意味します。一方、「バビロン」は「バベル」に由来し、「混乱」を意味します。つまり、「ミステリー・バビロン」とは、心の中に隠された秘密の混乱を意味します。

（聖書では額と呼ばれています）。

そのシステム（ミステリー・バビロン）の中にいる者たちは、それについて知らず、たとえ知らされても、そのシステムへの未知の強制的な入会によってその中にいるため、それについて話すことはできない。世界で機能しているこの組織化されたシステム、ミステリー・バビロンの目的は、世界を創造した神の言葉を反対し、人間、あるいは被造物を神がエデンの園で定めた規範から遠ざけること、そして神の規範に従うことを主張する者たちを迫害し、殺害することである。

マタイによる福音書第5章、第6章、第7章で主イエスが概説されています。多くの人は、この神秘のバビロンの霊が、クシュ（エチオピア）から来た偉大な狩人ニムロドの時代にこの悪を解き放ち始めたと考えられるかもしれませんが、これはそれよりずっと前から始まっていた。そうでなければ、カインが兄弟アベルの犠牲の方が神に受け入れられるほど優れていたため、兄弟の犠牲を捧げて殺したのは、一体何の霊だったのでしょうか。神の使いたちがこの地上に遣わされたのは、一体何の霊だったのでしょうか。彼らは天の美しさや喜びをすべて忘れ、人間の娘たちを欲しがり、結婚して巨人をこの世に生み出したのです。

ニムロデ以前から存在していたことがお分かりいただけるでしょう。しかし、ニムロデの時代には、それが物理的な体系となり、目に見える形で理解できるようになり、人々の離散や多くの言語の導入後も広がり続けました。人間の墮落後、悪魔によって築かれたこの体系は、今日まで存在し続けています。だからこそ、物質世界とそこにあるすべてのものを創造した神の言葉（主イエス）が地上に来られた時、人々は彼を受け入れることができなかったのです。

万物は彼によって造られた。造られたもので、彼によらないものは一つもない。彼は世におり、世は彼によって造られたが、世は彼を認めなかった。彼はご自分のところに来られたが、ご自分の民は彼を受け入れなかった。（ヨハネ1:3,10-11）

イエスは人類全体が実践している既存のシステムの一部ではなかったため、受け入れられることはできませんでした。そのため、イエスは当時から今も弟子たちの心をイエスの言葉へと導き、システムから抜け出すよう導き続けています。そのことは、以下の聖句からも読み取ることができます。

これらのことを話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。この世（の体制）では、あなたがたは苦難に遭うでしょう。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っています。（ヨハネ16:33）

彼らは世のものではありません。わたしも世のものではありません。（ヨハネ17:16）

わたしは彼らに御言葉を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものではないのと同じように、彼らも世のものではないからです。(ヨハネ17:14)

主は、もしあなたがシステムから抜け出し、神の言葉に従って生きることを受け入れるなら、主、すなわち神の言葉の中に平安があるとされました。しかし、この地上に存在するほぼ99%の人々が生まれた時から属しているシステムに留まるなら、あなたは苦難と心の苦しみに直面するだけでなく、主がいつ聖徒たちを連れ去るために来られるのかを知ることができなくなります。主イエスを恵みと真理の使者として受け入れ、また神の言葉として人として受け入れた者は皆、自分たちがシステムの一部ではないことを自覚すべきです。なぜなら、私たちの信仰の創始者であり完成者である主は、システムの一部ではなかったし、これからもシステムの一部にはなり得ないからです。繰り返しますが、もしあなたが真に神の言葉を受け入れるなら、ヨハネによる福音書15章18-19節で主が語られたように、この世のシステムとそれに属する者たちはあなたを憎むでしょう。

もし世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えておきなさい。もしあなたがたが世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、わたしが世からあなたがたを選び出したので、世はあなたがたを憎むのです。

世とそのシステムは、高次の存在、摂理、立案者、第一の道徳観を認識できません。これらは、世とそのシステムが父なる神、子なる神、聖霊を無視するために用いる用語です。世は道徳的問題、さらには律法のあらゆる道徳基準を理解しています。世もまた、正義を追求し、自らの行いや功績に没頭することができます。しかし、これらの信念はすべて、人間の善良さと功績に余地を残しています。人間はこれらすべてを受け入れながらも、自己に自信を持つことができます。しかし、世は恵みと真理に満ちた神を知りません。しかし、世が人間に充足感と功績を見出す限り、恵みを知ることはできません。私たちは、自分自身、世、そしてシステムへの依存を完全に断ち切らなければなりません。神の言葉であり、また、神の御子であるイエスに目を向けるよう努めるべきです。

恵みと真実の牧師よ、私たちをこの腐敗した体制から救い出すために彼が人類に与えてくださったものをしっかりと握りましょう。

神は、わたしたちを、文字によるのではなく、霊による新しい契約の有能な奉仕者としてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。(II コリント3:6)

文字で書かれた御言葉は人々の中に宿りません。ですから、恵みと真理の中を歩まない人々が、文字で書かれた御言葉を読むことによって神と神の命を見つけようとするとき、彼らが見出すのは、神の怒りが人間のあらゆる不敬虔と不義に対して向けられているということです。

男。

私はキリストの福音を恥じません。それは、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力だからです。そこには、信仰から信仰へと神の義が啓示されています。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。神の怒りは、不義の中に真理を隠している人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、天から啓示されています。(ローマ1:16-18)

義人は恵みによって生きるが、文字（言葉）の中に神を求め、恵みの中に神を求めないなら、彼らが見出すのは神の怒りだけである。なぜだろうか？それは、彼らが義と裁きの要求を見いだし、彼らに要求された義に達せなかったため、彼らが読んでいる文字（言葉）が彼らに裁きをもたらすからである。

しかし、御霊に導かれるなら、あなたたちは律法の下にはいません。

(ガラテヤ5:18)

ここでの「律法」という言葉は、神の裁きと怒りを意味しており、それはこの世の体制に満ちています。私が律法（神の裁きと怒り）の下にいないのは、私が神の霊によって生まれ、また霊に導かれているからです。イエスは神が遣わされた者として、そして神が恵みと真理の使者として遣わされた者として受け入れられなければなりません。世はイエスを、彼らを救い、解放し、彼らを神の敵へと変えたこの世の体制から連れ出すために来た救い主として受け入れていません。それは、彼らが神の言葉に従わなかったためです。

イエスは彼らにシステムから抜け出すよう促します。もし誰かがイエスを恵みと真理の使者として受け入れず、御言葉に定められた原則に従わないなら、イエスはその人の人生の主ではありません。この世とそのシステムが実践している宗教は、イエスを人類への神の恵みとして教えていません。それはむしろ迷信であり、だからこそキリスト教は宗教とはみなされないのです。キリスト教はキリストのような生き方とみなされており、だからこそ、霊と真理をもって神を礼拝する真のクリスチャンは、イエスを恵みと真理の使者として受け入れるのです。

働く者には、その報いは恵みとしてではなく、負債としてみなされます。しかし、働かずに、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じる者には、その信仰が義とみなされます。

(ローマ4:4-5)。

もし私たちが恵みを受けるために何かをするなら、それはもはや恵みではなく、行いなのです。この世とそのシステムは、主イエスに従うことを含め、何事においても努力し、努力しなければならぬと信じていますが、神の言葉と神の言葉に従う人々は、すべてを行うには完全に神に頼らなければならない、そうでなければ神の恵みの中を歩んでいない（神にまったく頼っていない）と信じています。

あなたが世から選んで私に与えてくださった人々に、私は御名を現しました。彼らはあなたのものであり、あなたは彼らを私に与えてくださいました。彼らはあなたの約束を守りました。(ヨハネ17:6)

神の恵みと真理を受け入れ、この世とその体制から完全に離れることに同意する人々は、神が主イエスに与え、神のもととされた人々であり、彼らは常に神の約束を守ります。なぜでしょうか？それは、雌やぎは蛇も子牛も産むことができず、雌やぎでも雄やぎでも同じだからです。イエスはこの世とその体制から完全に離れており、世のものではありませんでした。ですから、神の恵みを受け入れ、神のものである人々は、真理を生み出し、神の約束を守るために、イエスに似た者となるのです。この世の体制の一部である者は、神の言葉を守り、神の霊に導かれることは不可能です。

わたしは彼らのために祈ります。世のために祈るのではなく、あなたがわたしに与えてくださった彼らのために祈ります。彼らはあなたのものなのです。(ヨハネ17:9)

これは多くの人が衝撃を受けるかもしれませんが、なぜなら、イエスはこの世とその体制のために祈っているのではないからです。イエスはむしろ、ご自身の恵みを受け、神の言葉を守り真理を生み出している人々のために祈っているのです。ですから、もしあなたがこの世とその体制の中に留まり続けるなら、あなたは主イエスの統治の物理的な顕現を阻止しようと企む者たちの一員であることを心に留めてください。

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われるからです。信じたことのない方を、どうして呼び求めることができますでしょうか。聞いたことのない方を、どうして信じることができますでしょうか。宣べ伝える者がいなければ、どうして聞くことができますでしょうか。遣わされなければ、どうして宣べ伝えることができますでしょうか。聖書にこう書いてあるとおりです。「平和の福音を宣べ伝え、良い知らせを告げ知らせる者の足は、なんと麗しいことか。」(ローマ10:13-15)

「呼び求める」という言葉はギリシャ語で「エピカレオマイ」と言い、エピカルエホムアヒーと発音します。これは、「資格を与える」「(援助、礼拝、証言、決定などのために)呼び求める」「(～に)訴える」「(～に、～に)呼び求める」「名字を呼ぶ」という意味です。ロングマンズ辞典によると、「呼び求める」とは、自分の見解を裏付けるために法則、原則、理論を用いる、特定の考え、イメージ、感情を人々の心に思い起こさせる、自分よりも力のある者、特に神に助けを求める、という意味です。この聖典の箇所では「呼び求める」という言葉の完全な意味を明らかにするのに時間を割いたのは、この世とそのシステムが真に主を呼び求めているからです。なぜでしょうか？それは単純なことです。

彼らは主イエスを神の特別な人類への恵みとして信じていません。それは、神からの神聖な癒しを信じない人に癒しを施すようなものです。どんなに祈っても、相手はあなたの行いに信仰を持たないので、何も起こりません。世の人々は主イエスの助けを真に求めることができません。なぜなら、彼らは主イエスが自分たちが直面しているシステムよりも強力であると信じていないからです。彼らはまた、システムが悪い、非常に腐敗していると信じていません。なぜシステムの中にいる人々の心はこれほどまでに頑固にならなければならないのでしょうか？それは、神の信者や聖職者が

世の光であるはずの神（世は闇と邪悪の中にあるため）と、また神の恵みの物質的な顕現であるはずの神は、イエスがもはや肉体的にはこの世にいないため、この世に深く埋もれ、生活のあらゆる面でこの世のシステムに安易に従っています。

そして彼らは、その腐敗した体制中での自分たちの存在を正当化し、それによって世の人々がイエスの光を見ることを、不可能とまでは言わないまでも、困難にしています。神の牧師や信者の大多数が、この世の体制への関与についてどれほど正当化しようとも、神の言葉は変わりません。体制は腐敗しており、体制の中にいる者たちも腐敗しており、主の呼びかけに応じて出て来るまで、不義の中を歩み続けるでしょう。そのような説教者や牧師は、そこに行き、説教し、奇跡を行うかもしれませんが、神は彼らを遣わされませんでした。なぜなら、彼らは恵みと真理の牧師である神を信じ、従うことを拒否したからです。

第7章

GRACE FOR GRACEとは何ですか？

私はこの本の冒頭で、ギリシャ語で「恵み」を意味するカリスという言葉の意味を書き留め、英語では「受け入れられる、利益、好意、贈り物、喜び、寛大さ、楽しみ」などと説明しました。また、ネルソンス新図解聖書辞典の編集長であるロナルド・F・ヤングブラッドは、恵みを好意や親切と表現しました。

受ける者の価値や功績に関わらず、またその人が何に値するかに関わらず、示される恵みです。ですから、恵みに対する恵みとは、私たちが神の恵みを受け、恵みへと導かれることを意味します。これはさらに、私たちが値しない神の好意、賜物、恩恵、親切などを受け、たとえそれに値しない状況や分野においても、人類や神の被造物から、恵みや好意、賜物、恩恵、親切などへと導かれる、と説明されます。私が説明しようとしているのは、主イエスを恵みと真理の使者として受け入れ、神の恵みが生み出す真理の中を歩むことで神の原則に従おうと努める人は皆、そのような好意を受けることが不可能な分野においても、人々から信じられないほどの好意、恩恵、親切を受けることに気づくということです。未信者でさえ、イエス・キリストの福音の真の使者は、どのような状況においても大きな自信と大胆さを持って歩んでいることに、私に同意するでしょう。なぜでしょうか？ダビデ王は詩篇の中でその答えを与えています。

地とその満ちみちるもの、世界とそこに住む者とは主である。(詩篇 24:1)

神の真の奉仕者は、この聖書の言葉を信じます。すなわち、地と地にあるすべてのものは、恵みと真理の奉仕者である主の所有物であるということです。そして私たちは主を信じ、歩むのです。

神の恵みにより、私たちが地球と地球上のすべてのものを神の所有物とします。

ソロモン王はまたこうも言っています。「悪人は追う者もなく逃げるが、義人は獅子のように勇敢である。」(箴言28:1)

私たちにこのような大胆さを与えているのは、キリスト・イエスにおいて神の義となるために受けた恵みです。私たちはどこへ行っても、神の箱(臨在)を担っています。そして、キリストの使者として、私たちはこの世に存在するいかなる権威や権力にも立ち向かう法的権利を持っています。なぜなら、それらはすべてキリスト・イエスに服従しているからです。一方、私たちはキリストと一つです。

使徒パウロはローマ人への手紙第8章で律法と御霊を比較したとき、自分が何を意味していたのかを正確に理解していました。実際、彼が比較しようとしていたのは律法と恵みでした。彼が言いたかったのは、あなたが恵みのうちに歩むなら、神の御霊があなたの霊に、あなたが神の子であることを証するということです。それでパウロはこう言いました。

もし子どもであれば、相続人でもあるのです。神の相続人であり、キリストと共同の相続人です。キリストと苦難を共にするのは、栄光をも共にするためです。(ローマ8:17)

共同相続人という言葉はギリシャ語で sugkleronomos であり、共同相続人、共同相続人、一緒に相続人、共に相続人という意味です。ロングマンズ辞典によると、相続人とは、他の人が亡くなったときにその財産や称号を受け取る法的権利を持つ人を意味します。私たちが(人類)が住むこの第二の物理的な地球は、神が初めに天(父なる神の住まいである第三の天)と共に創造した最初の霊的な地球の一部でしたが、天も空虚で形がありませんでした。したがって、この地球は神の所有物であり、神はアダムを創造し、地球の統治権を彼に与えました。アダムはサタンによってこの地球を統治する法的権利を失いました。しかし、神は第二のアダム(主イエス)を創造し、その死と復活を通して、地球を統治する法的権利を契約の兄弟である私たちに回復してくださいました。

したがって、ストロング聖書徹底訳では共同相続人を共通の参加者として説明しているので、

主の恵みを受け、また主の恵みの中を歩むなら、主の苦しみにあずかるだけでなく、主の財産と称号の両方を受け取る法的権利も持つことになります。だからこそ、真の神の奉仕者は大胆さを持つのです。なぜなら、彼らは主イエスとの共同相続人として、いかなる権威にも立つための上からの権威を持っていることを知っているからです。

イエスを恵みと真理の使者として受け入れなければ、イエスを自分の主であると言うことはできません。そして、この世の体制から離れなければ、イエスを恵みと真理の使者として真に受け入れることはできません。この世の体制は神の恵みに完全に反するものであり、もしあなたがこの恵みを実際に受け取るなら、あなたはその体制から外れてしまうでしょう。恵みを受けるなら、どこへ行っても、イエスを通して受けた恵みは、常にあなたを恵みへと導くでしょう。

そして、御言は肉となり、私たちの間に住まわれた。私たちはその栄光を見た。父の独り子としての栄光である。御言は恵みと真理に満ちていた。ヨハネは御言について証しし、叫んで言った。「私が言ったのは、この方である。『私の後に来られる方は、私よりもすぐれている。私より先におられたからである。』私たちは皆、御言の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。」(ヨハネ1:14-16)

ヨハネは聖霊の導きによって、父なる神の独り子であるイエス・キリストは恵みと真理に満ちていると言いました。そして、恵みのうちに歩む私たちは皆、この無償の賜物の豊かさを受けています。恵みの上に恵みが加わる恵みの賜物の豊かさは、あなたがどこにいても恵みのうちに歩むことを可能にします。なぜなら、あなたの土台は恵みだからです。ですから、あなたがどこへ行っても、神の恵みは常にあなたを支え、支えてくれるのです。

そして主は私にこう言われました。「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さの中で完全に現れる。それゆえ、キリストの力がわたしの上に宿るように、むしろ喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(コリント人への第二の手紙12章9節)

私たちに対する神の恵みは十分です。なぜなら、私たちは神の恵みを完全に受けたからです。神の恵みはあらゆるものを覆い、私たちに必要なもので神の恵みが与えてくれないものは何ともありません。私たちが神の恵みを受ける唯一の理由は、

それらのいくつかを持ってないのは、知識のせいです。知識が深まるほど、それらの能力はより顕著になります。

ですから、心の腰帯を締め、慎み深くして、イエス・キリストの現われのときにあなたがたに与えられる恵みを最後まで待ち望みなさい。(ペテロ第一1:13)

この恵みは、イエス・キリストの啓示によって生まれ、私たちが新しい啓示の中を歩ませます。これは継続的なプロセスです。イエス・キリストの啓示を受けると、新しい啓示の中を歩むことができるように恵みが与えられます。

しかし、あらゆる恵みの源である神、キリスト・イエスによって永遠の栄光へと私たちに招いてくださった神は、しばらくの苦難の後、あなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、安定させてくださいます。(ペテロの手紙一 5:10)

これは、神の擬人化された備えについて語っています。それは、恵みの上に恵みが加わり、私が必要とするものはすべて与えられていることを示す、究極の備えを意味します。

これらすべてに、罪人を贖い、義と認める恵みがあるだけでなく、地上の人生におけるあらゆる変化、あるいは変わりやすい状態をも経験させ、最終的に神の御子の姿に似せる恵みがあります。これは恵みの上に恵みが重なるものです。なぜなら、モーセが与えた律法とは対照的に、イエス・キリストによってもたらされた恵みと真理だからです。これはキリストの豊かさのすべてであり、決して人間の努力によってもたらされるものではありません。イエス・キリスト (光)の真の証人となるには、この恵みの上に恵みが重なる純粋なメッセージが必要です。

今、わたしの心は騒ぎ立っています。何と言えばよいでしょうか。父よ、御名の栄光を現してください。すると、天から声が聞こえて、「わたしはすでに栄光を現した。また、さらに栄光を現すであろう」と言われた。(ヨハネ12:27-28)

この箇所は、恵みに対する恵みのより明確な描写を示しています。つまり、わたしは以前にわたしの名を栄光に輝かせた。そして主はこう言われた。「わたしは再び栄光を輝かせる。」神の恵みを受け、それに従って歩むからこそ、わたしの内に神の栄光が宿り、わたしがどこへ行っても、神は再びその栄光を現してくださるのです。

回復の恵み

回復とは、単に何かを元の所有者に正式に返す行為を意味します。回復のための恵みについて語るとき、私たちは人類と他の被造物を、彼らの罪を負わせることなく、創造された時の状態に回復させてくださる神の慈悲について語っています。この理由から、使徒パウロは聖霊の導きによってこう言いました。

すべては神から出ており、神は私たちに和解の務めを与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、世をご自分と和解させ、その罪を彼らに負わせることなく、和解の言葉を私たちに託してくださいました。(IIコリント5:18-

19)。

回復の恵みは、罪を負わせたり、罪が何回犯されたかを記録したりしません。なぜでしょうか？神が回復の恵みを解き放つと、罪人の行為は、あたかも一度も罪を犯したことがないかのように、清らかな記録となるからです。そして今、神は恵みのうちに歩む奉仕者たちに、まさにこの同じ働きとメッセージを託しておられます。私たちは、回復の準備ができている人を、いかなる罪も負わせることなく、またさらなる罰を与えることなく、回復させます。

あなたがたは、キリストの血によって贖われ、罪の赦しを受けているのです。これは、キリストの豊かな恵みによるのです。(エペソ1:7)

これは、私がイエスを受け入れる前に犯した罪を意味するだけでなく、イエスが来られる前に私が犯す罪は、私が受け、歩んでいる恵みのゆえにすでに赦されていることを、今イエスは私に示してくださっています。罪は、人を完全な人間性へと回復させる神の恵みの豊かさに従って赦されるのです。

再生の恵み

再生とは文字通り、再び生まれる、あるいは再生を意味します。それは、神の御業によって人の人生にもたらされる精神的な変化です。

再生は人の罪深い性質に変化をもたらし、それによって人は神に応答するための恵みを受けます。再生とは、罪深い肉体から聖霊へと人が再び生まれ変わることです。

聖霊によって生まれることは、人が

神の国に入ることができます。神がその民に与えた、自己中心から神中心へと人格を変革するというあらゆる霊的な戒めは、生まれ変わるための呼びかけです。

再生には、心の啓示、意志の変化、そして新たな性質が含まれます。再生の必要性は、アダムの墮落後に私たちが受け継いだ人間の罪深さから生じます。

神は人の心に働きかけ始め、人が信仰を通して神に応答するにつれて、恵みを通して再生を開始されました。したがって、再生とは聖霊を通して神が行う行為であり、罪からの復活、そしてイエス・キリストにおける新たな信仰への復活をもたらします。

イエスは答えられました。「よくよくあなたに告げます。人は水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできません。肉から生まれた者は肉であり、霊から生まれた者は霊です。」(ヨハネ3:5-6)

これは、再生、つまり再生をもたらす、恵みに次ぐ恵みです。これは私たちがイエスのように完全な者へと導きます。なぜなら、これは再生の恵み、つまり永遠の命の賜物であり、アダムによって失われた命の回復に近いからです。この恵みに次ぐ恵みは、人が罪を自覚し、悔い改める（生まれ変わる）ときに明らかにされ、真の悔い改め、水と聖霊による洗礼、つまり回心の恵みへと導きます。回心は真の悔い改めの人生への扉を開くのです。

今日立ち上がる恵み

このように、私たちは信仰によって義とされ、私たちの主イエス・キリストによって神との平和を得ています。また、私たちはキリストによって、信仰によってこの恵みに導かれ、その中で神の栄光に望みを置いて喜んでいるのです。(ローマ5:1-2)

信仰による義認によって、私たちは神との平和を得ることができました。また、キリスト・イエスにある神の恵みにあずかることもできました。そして、私たちは今日、その中で立ち続けることができるのです。どこにいても、悪魔が何をしようとも、私は障害に耐える恵みを持っています。

しかし、私は神の恵みによって今の私であり、私に与えられた神の恵みは無駄にならず、私は彼らみんなよりも多く働きました。しかし、それは私の力ではなく、私とともにあった神の恵みによるのです。(コリント第一 15:10)

神の奉仕者、そして恵みと真理の僕たちは、自分たちが神の恵みによって今のような存在になったのだと悟り、肉を誇ることをやめるべきです。あなたがいかに御言葉に励もうとも、奇跡を起こそうとも、あなたを支え、立たせてくれるのは神の恵みであることを意識しなければなりません。パウロはこのことを知っていたので、肉を誇りませんでした。たとえそうしたいと思っても、彼の内にある恵みは肉を誇ることを許さなかったからです。私はどこにいても、すでに受けた神の恵みのゆえに、挫折感を味わうべきではありません。あなたがたは、イエスを恵みと真理の奉仕者として受け入れたまさにその時から、恵みがもたらすすべてのものを受けています。ただ、知識において成長する必要があるという点を除いては。なぜなら、あなたがたは既に受けていた恵みを通して、神の言葉によって心を新たにされる必要があるからです。

奉仕職の恵み

しかし、私たち一人一人には、キリストの賜物の量に応じて恵みが与えられています。そして、キリストは、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音伝道者、ある人を牧師、また教師としてお立てになりました。

それは、聖徒たちを完成させ、奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。(エペソ4:7,11-12)

キリスト・イエスにあって神の義とされるために私たちが受けた神の恵みのほかに、神は、キリスト・イエスにあって各人に与えられた奉仕の賜物に応じて、その奉仕者たちにも恵みを与えてくださいました。これが、恵みに対する恵みについて語っていることです。神が奉仕者に与えてくださった恵みの賜物は、彼らが聖徒たちを完成し、奉仕のわざをなし、キリストのからだを建て上げるという奉仕の務めを果たすことを可能にします。

奉仕職の恩恵においては、召命を受けた奉仕職に応じて恩恵が与えられます。例えば、

牧師、教師、伝道師は、使徒や預言者ほどの恩恵を聖職に与えられていません。預言者や使徒は、キリストの体において神の真理と正義を守ろうと努める中で、より高次の啓示、油注ぎ、そして試練に耐える勇気を授かっています。これは注目すべき重要な点です。なぜなら、多くの聖職者は自分の聖職について知らず、知っていても、その職務に魅力を感じないため、その職務に就く準備ができていないからです。彼らは、より利益の高い、十分な経済的向上と人気を得られる職務を選ぶのです。だからこそ、使徒パウロはこう言ったのです。

ですから、私たちは与えられた恵みに応じて、それぞれ異なった賜物を持っているのです。預言をする者は、信仰に応じて預言し、奉仕の務めを果たす者は、奉仕の務めを果たし、教える者は教え、勧める者は勧め、施しをする者は純朴に、指導する者は熱心に、慈しみを施す者は喜んで施しなさい。(ローマ12:6-8)

神はその恵みに応じて私たちに様々な賜物を与えてくださっています。ですから、誰かを模倣したり、真似したりするのは危険なことです。なぜでしょうか？

それは、神が私たち一人一人に与えてくださった恵みの中には、その人の人間的な弱さが満たしてくれる部分があり、もしあなたがそのような人に倣って自分の奉仕の務めを果たそうとするなら、同じ誤りに陥り、それがあなたの召命に影響を与えるかもしれないからです。

再び、多くの人は自分の奉仕の職が現れるのを待っていません。

彼らは総監督から資格証書を受け取った後、副牧師や伝道師に任命されるだけで、聖霊が初期の使徒パウロとバルナバにされたように、神から任命された奉仕の職に就くよう彼らを任命するのを本当に待つことはありません。(使徒言行録1:4-8、13:1-3参照)。例えば、私は主によって選ばれ、使徒の職に訓練を受けましたが、同時に主に用いられ、献身的な男女と子供たちからなる小さな集団を訓練し、牧会しています。しかし、1992年の訓練の後、私は妻と子供たちと共に、私の奉仕の職が現れるのを、あるいは主がそれを成し遂げてくださるのを待ち続けました。

牧師としての召命を授けられました。そして3年間待ち続け、1995年4月、主は私の心にエヌグを離れ、牧師としての召命を始めるためにラゴスへ移るようにと告げられました。

それ以来、あらゆる試練や迫害にもかかわらず、主は一度も私を見捨てたことはありません。使徒パウロが「自分の奉仕を待たなければならない」と言ったのは、まさにこのことを意味していました。なぜなら、パウロ自身がそれを経験し、真の証人だったからです。もし私が主の遣わしを待たずに独り立ちしていたら、今頃は大きな欺瞞と恥辱の中にいたでしょう。聖霊はそのような人を遣わした方ではないので、聖霊があなたの計画や奉仕に加わることは決してないからです。しかし、主が自らあなたを遣わすなら、主はあなたを支え、神の真の油注ぎがあなたに従います。なぜなら、神はしるしと不思議によってあなたの言葉を現し、あなたが説く神の言葉には信憑性が与えられるからです。

第8章

恵みは死から命を生かす

人間の働きまたは能力

神の恵みの最初の計画は、死の問題に対処することです。

恵みは、罪と死に対する神の答えです。天地創造の際、恵みはエデンの園に生命の木の形で存在し、死もまた善悪を知る木の形で存在しました。しかし、最初の間人は、禁断の善悪を知る木の実を食べることで、自分と全被造物を恐怖と死に陥れることを選びました。しかし、神は限りない慈悲をもって、恵みを拒絶したことに対する罰である死を支払われた主イエスを通して、この恵みを人類に回復されました。義にかなって働こうとする人の努力はすべて、人にそれをする恵みがなかったために、主イエスが人の能力で成果を出せなかった後に来るまで、実を結ばなかったのです。そして、これこそ使徒ヨハネが聖霊の導きによってここで明らかにしようとしていることです。

三日目にガリラヤのカナで婚礼があり、イエスの母もそこにいた。イエスも弟子たちも婚礼に招かれていた。ぶどう酒が足りなくなったので、母はイエスに「ぶどう酒がありません」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとあなたは何のかかわりがあるのですか。わたしの時はまだ来ていません。」

母は召使いたちに言った。「彼が言うことは何でも、あなたがたに言いなさい。」ユダヤ人の清めの慣例に従って、石の水がめが六つ置かれ、それぞれ二、三立方メートルの水が入った。

イエスは彼らに、「水がめに水を満たしなさい」と言われた。彼らは縁まで満たした。イエスは彼らに、「さあ、汲んで、宴会の世話役に持って行きなさい」と言われた。彼らはそれを運んだ。宴会の世話役は、ぶどう酒になった水を味見したが、それがどこから来たのか分からなかった。(しかし、水を汲んだ召使たちは知っていた。)宴会の世話役は花婿を呼び、「人は皆、初めに良いぶどう酒を出すか、

人々が十分に飲んだとき、次にもっと悪いワインを飲むのに、あなたは良いワインを今まで取っておかれた。(ヨハネ2:1-10)

ワインが尽きたとき(つまり、人間の働きや能力の限界)、彼らは恵みを求めた。彼らが実際に求めていたのは霊(ワイン)であり、肉の働き(律法)ではない。神の恵みと真理の働きは、人間が人間としての能力、働き、力の限界、あるいは資源の限界に達し、神の恵みを受け入れるときにのみ達成される。イエスは、すべてが死である鉱水に属する死んだ物質、つまり無機物を、生命の領域に属する生きた物質、つまり有機物に変えた。水は岩のように無機物(死んだ物質)であるが、ワインは

恵みを象徴する有機(生きた)物質です。

このミネラルウォーターの奇跡はイエスの最大の奇跡を象徴している。

奇跡です。それは再生、あるいは新たな誕生の奇跡だからです。

そこに6つの石の水差しが置かれていたのはそのためです。そして、これを見てください

ユダヤ人を清める方法に倣って、言葉で清めるのです。これはどういう意味でしょう

か。6は人間を表す数字であり、聖書は私たちが岩(キリスト)から切り出された石であることを証明しています。ここで言う清めとは霊的なことであり、罪深い人生をキリストの人生へと清める、あるいは変えることです。水がワインに変わることは、キリストの救い主であることに関係しています。イエスは4節で母(マリア)に話しかけ、再生の働きは罪深い肉や人間とは何の関係もないことを示しました。神と人間の間唯一の仲介者はイエスであり、イエスはご自身の主権を示すためにそうしました。もしイエスがマリアをご自身の働きや奉仕の一部とすることを許していたなら、彼女はイエスにおける神の信頼性を奪っていたでしょう。なぜでしょうか?答えは簡単です。マリアはこの世の者でしたが、イエスは上(天)から来られ、イエスが行っていた働きは天のものでした。

義を追い求め、主を求める者たちよ、わたしに聞き従いなさい。あなたがたが切り出された岩と、あなたがたが掘り出された穴の穴に目を留めなさい。あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラに目を留めなさい。わたしは彼を一人だけ召し、祝福し、彼を豊かにしたからである。(イザヤ書51:1-2)

神はアブラハムになされたように、キリストの花嫁である私たち一人ひとりを召し、私たち一人ひとりを個々にイエスにあって復活させられました。私たちが個々にイエスにあって復活させられることによって、私たちは共に主の花嫁となることができます。マリアは当時のようにイエスにあってはおらず、したがってイエスの御業の一部ではありませんでした。初期の使徒たちはイエスにあって復活させられたので、イエスの一部でした。イエスは、マリアがご自分の御業の一部ではないことをすべての人に知ってほしかったのです。これは、改宗の有無にかかわらず、親戚や友人を自分の奉仕の一部とみなしている神の牧師たちにとって、目を見張る出来事となるはずですが、そうすることで、彼らの多くは道を見失い、ひどく悪霊に取り憑かれ、神中心主義から自己中心主義へと墮落してしまいます。ヨハネはイエスが行った奇跡について多くは言及していません。実際、ヨハネはイエスが十字架にかかる前に行った七つの奇跡を記録しており、それらはすべてイエスが人類に命とより豊かな命をもたらすことを示しています。イエスは旧約聖書最後の預言者として、人々が信じるように奇跡を行いました。今、恵みのもとで、神は人々に信仰をもたらすために御言葉を与えられました。神が今日行う奇跡は霊の領域で行われます。恵みと真理によって成し遂げられることは、神の物質的な体を通して表現されるとはいえ、霊的なものです。

男性。

信者の働きは霊的なものであり、肉体的なものではありません。なぜなら、恵みの賜物である永遠の命は霊的なものだからです。

私たちの主イエス・キリストの神であり父である方が祝福されますように。神はキリストにおいて、天にあるあらゆる霊的な祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

(エペソ1:3)

神が私たちに与えてくださった約束（祝福）は霊的なものであり、それが肉体に現れていなくても問題ではありません。律法の下では、神の命にあずかることはできませんでした。彼らは肉の力の中で歩み、約束は地上的で物質的なものに過ぎませんでした。

神は唯一であり、また神と人との間の仲介者も唯一、すなわち人であるキリスト・イエスです。(テモテ第一 2:5)

神と人の中には仲介者はただ一人しかいないと使徒パウロが聖霊の導きによって述べたのは、神の恵みの働きに人間的な要素が介入してはならないということを意味していました。天使や聖人（例えば、よく話題になる聖母マリア）の名を用いて神に祈ったり、恵みを求めたりする行為はすべてオカルト的であり、事実上、降霊術のようなものです。そのような行為は神に対する重大な反逆です。私たちが救いや癒しなどを得ることができる唯一の名は、イエスの名を通してです。

それは、神の恵みの栄光をたたえるためです。神は、その恵みによって、私たちが愛する者に受け入れさせてくださいました。（エペソ1:6）

恵みの働きによって、私たちは真に神に受け入れられるようになりました。人間の力ではそれはできません。人間の努力は再生の働きとは何の関係もありません。

この奇跡の始まりは、イエスがガリラヤのカナで行い、その栄光を現したため、弟子たちはイエスを信じた。

（ヨハネ2:11）

イエスは自身の栄光を現すためにこの奇跡を起こしました。そして、神が福音の真の牧師を説教に遣わすとき、その人は神の栄光を現すためにそこへ行くのです。ですから、悪魔が神の信頼性を奪うことを許してはなりません。

ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。そして、神殿で牛、羊、鳩を売る者たちと両替人たちが座っているのを御覧になった。そして、細い縄で鞭を作り、羊も牛も皆神殿から追い出し、両替人たちの金をまき散らし、台を倒された。そして、鳩を売る者たちに言われた。「これらのものを持って行きなさい。わたしの父の家を商売の家としないでください。」（ヨハネ2:13-16）

神殿を清める際にイエスが行使した権威は、イエスの主権と関連しており、イエスとその神殿の主であることを示しています。神殿の清めは霊的に、聖霊の神殿である私たちの体の清めと関連しています。ヨハネが記した、主が縄で両替人を鞭打ったことについては、

イエスがどのような方であったかは、聖霊が使徒パウロにヘブル人への手紙に書かせたものから見て理解できました。

あなたたちは、子どもに対するように語られた勧めの言葉を忘れていない。「わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。主に叱責されても弱り果ててはならない。主は愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子を鞭打たれるからである。もしあなたがたが懲らしめに耐えるなら、神はあなたがたを子として扱われる。父が懲らしめない子が、いったい何の子であろうか。もしあなたがたが、すべての人が受ける懲らしめを受けないなら、あなたがたは私生児であって、子ではない。」(ヘブライ12:5-8)

ヨハネが言及した縄による鞭打ちは、神が御子らに示された愛の一部です。共観福音書であるマタイ21:12-13、マルコ11:15-17、ルカ19:45-46は、律法のもとで書かれたため、縄による鞭打ち(すなわち、神の民への愛)については触れていません。しかし、ヨハネは恵みのもとで書かれたため、このことについて触れています。他の福音書は、イエスが父なる神の律法を守るために彼らを神殿から追い出したことを記していますが、最も重要な点、すなわち神の民への愛については隠しています。

イエスは主の家(私たち自身)に対する熱意ゆえにそうされましたが、その熱意は神の愛から生まれたものです。主はヨハネ2章16節にあることをヨハネにこのように語らせ、商売の家は悪いものではないが、神の家にあってはならないことを示したのです。神の家や神の羊(神の奉仕者)は、商売として、あるいは商売のために使われるべきではありません。

神の家にあるものはすべて自由であり、ヨハネが示そうとしていたのはまさにそれです。キリストは私たちの充足であり、キリストにおいてはすべてが自由です。だからこそヨハネは「わたしの父の家を商売の家としてはならない」と書いたのです。

イエスは奇跡と説教のために適切な場所を選びました。

これらは、イエスが教えている恵みと真理の特別なメッセージと密接に関連しています。イエスの宣教の初めに、恵みと真理の宣教はガリラヤのカナでの結婚式から始まりました。そして、イエスの恵みと真理の宣教は、第二の天における再生による小羊の婚礼で終わります。

サタンとその手先たちはこの地上に落とされました。同様に、洗礼者ヨハネはイエス（恵み）について証しするために来ました。彼は光そのものではなく、むしろ光について証しするために遣わされたのです。使徒ヨハネは恵みの福音を記しました。ヨハネという名前は「神は恵み深い」という意味で、神と恵みとの繋がりを示しています。

まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かったときには、自分で帯を締めて、自分の行きたい所へ歩いて行った。しかし、年老いたときには、あなたは手を伸ばし、他の者があなたに帯を締めて、あなたの行きたい所へ連れて行くでしょう。イエスは、どのような死によって神に栄光を帰すかを示して、こう言われた。こう言うてから、イエスは彼に言われた。「わたしに従いなさい。」（ヨハネ21:18-19）

イエスがこの言葉を語ったのは、ペテロが人間としての能力や業績の限界に達し、あるいは行いに死に、恵みと真理を受け入れる時、神がペテロにおいて栄光を受けることを示すためでした。「汝が若かった時」とは、ペテロがまだ若いクリスチャンだった頃のことです。若い頃（肉体的にも霊的にも）は、エネルギーに満ち溢れ、自ら努力し、立ち上がり、好きな場所へ動き回り、やりたいことをやっていました。これは若さの活気の表れであり、今日の信者の大多数と一部の福音伝道者も、この状態にあります。彼らはイエスの名において、神が栄光を受けようが受けまいが、気にせず、好きなことを何でもやります。「汝が年老いた時」とは、ペテロが霊的に年老いたり成熟したりした時、別の人があなたに帯を締め、聖霊が彼を導き始める時を意味します。

そして、聖霊が誰かの指導権を握るとき、聖霊は、人間としてやりたくないことをさせたり、行きたくない場所に連れて行ったりするでしょう。この行為によって、イエスは、恵みの啓示を受け、肉の十字架を通して神の恵みと真理の中を歩む人々から神が栄光をお受けになることを示しました。そのような人々は肉に誇りを持つのではなく、むしろ神が彼らのすべての行いにおいて栄光をお受けになるのです。

主は言われた。「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけてることを望んでいる。しかし、わたしはあなたがたのために祈った。

あなたの信仰がなくならないようにしなさい。そして、あなたが立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。(ルカ22:31-32)

イエスがこの発言をしたのは、ペテロがまだ内に恵みと真理の啓示を受け取っておらず、そのために改心していないことを示すためでした。

あなたが内なる恵みと真理の啓示を受け、それに従って歩むまでは、あなたはまだ回心していません(マタイ18:3参照)。そして、人間の能力が尽きたときに初めて、あなたは神の恵みの中を歩むことができます。

イエスは話し終えると、シモンに言われた。「沖へ漕ぎ出して網をおろし、水汲みをしなさい。」シモンは答えて言った。「先生、私たちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉どおり、網をおろしてみます。」(ルカ5:4-5)

この箇所が何を語っているのかをより明確に理解するために、聖書コンコーダンスで「toiled (苦労した)」がどのように表現されているかを見てみましょう。「toiled (苦労した)」

という言葉はギリシャ語で「コピアオ」で、「疲労を感じる」「懸命に働く」「労苦を(与える)」「苦勞する」「疲れ果てる」という意味です。ペテロが「私たちは夜通し労苦ししました」と言ったのは、彼らが全力を尽くし、働き疲れ果ているという意味です。ここで「夜」という言葉が使われているのは、彼らが罪に定められながら働いていたことを示しています。

彼らは罪人であり、罪を捨て、闇の中を歩むことをやめ、光の中にのみ見出される神の恵みを受け入れることを知らなかったのです。神の恵みを受ける者は、夜や闇の中ではなく、光の中、つまり昼の中を歩み、苦勞することはありません。むしろ、彼らは主イエスを自らの主であり救い主として信じ、その言葉に無条件に従うのです。

しかし、ペテロとその同僚たちは、自分たちのあらゆる人間的努力にもかかわらず、何の成功も得られないことに気づいたとき、自分たちのために真理をもたらしてくれた恵みの使者に頼りました。

そして、彼らが真理に従うと、非常に望んでいた結果が得られました。

シモン・ペテロの罪深い人生を照らした神の光

8節でシモンは、自分は罪深い人間なので、イエスに（シモンに）離れて欲しいと懇願し、すぐに自分の罪を認めました。

十二年間も長血を患い、医者にも全財産を費やしてもなお、誰からも治ってもらえなかった女が、イエスの後ろに近づき、イエスの着物のふさに触れると、たちまち長血が止まった。イエスは言われた。「だれがわたしに触れたのか。」皆が否定すると、ペテロとイエスの仲間は言った。「先生、群衆があなたに群がって迫ってきていますが、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」イエスは言われた。「だれかがわたしに触れたのです。わたしの力が出て行ったのが分かりました。」女は隠れていないのを見て、震えながら進み出て、イエスの前にひれ伏し、群衆の前で、なぜイエスに触れたのか、またどのようにしてすぐに治ったのかを話した。イエスは彼女に言われた。「娘よ、安心しなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」（ルカ8:43-48）。

12という数字は神の力と権威を象徴しています。この女性は自分の人間的な力、つまり富に深く信頼を置いていました。彼女は神の恵みには全く関心がなく、お金があれば問題を解決できると信じていました。しかし、そこが彼女の大きな間違いでした。彼女はすべての資産を医者につぎ込みましたが、治癒を受けることができませんでした。彼女が信頼し、財産を投じた医者たちは神の恵みの使者ではなかったため、彼女は治癒を受けることができなかったのです。彼女はまた、自分の力が尽きるまで神の恵みを求めませんでした。これは、キリスト教を信仰していると公言する多くの人々が常にそうであったようにです。ですから、彼女の人間的な能力が尽きると、彼女はお金をかけたり、人間の努力なしに得られる恵みを求めたのです。そして、彼女が公然と告白する前から、神の恵みは彼女の心の願いを満たしました。

第9章

恵みを拒むことは非難をもたらす

非難という言葉はギリシャ語で「クリシス」と言い、これは（賛成または反対の）決定を意味し、その延長線上では法廷、そして暗黙のうちに正義（特に神の法）：告発、非難、天罰、審判を意味します。ネルソンス新図解聖書辞典によると、非難とは、人を有罪とし、罰に値すると宣言することを意味します。非難は司法用語であり、正当化の反対語です。非難に至るのは、義の産物である恵みを拒絶することです。恵みを拒絶すると、罪が忍び寄り、それは直ちに非難につながり、最終的には罪人を死（つまり神からの永遠の分離）へと導きます。

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためです。御子を信じる者は裁かれません。しかし、信じない者はすでに裁かれています。神の独り子の名を信じなかったからです。裁きとは、光が世に来たのに、人々はその行いが悪かったので、光よりも闇を愛したことです。悪を行う者は皆、光を憎み、光に近づこうとしません。自分の行いが明らかになるのを恐れています。（ヨハネ3:17-20）

イエスを救い主として受け入れることを拒否すると、裁きが下されます。恵みを受け、それに従って歩む人は、どこへ行っても神の恵みを携えています。たとえ人々がイエスを愛し、イエスが共にいてくれることを望むとしても（ヨハネ4:40のサマリア人がイエスにそうしたように）、もし彼らが主のメッセージを受け入れなければ、

彼を通して与えられるなら、彼らは光を受け入れることを拒み、暗闇の中を歩むことを選んだので、非難が彼らに降りかかり、裁きが下るでしょう。

裁きを避けるためには、主イエスを信じなければなりません。信じなければ、裁きが来るからです。「信じなければならぬ」に下線を引いた。

なぜなら、他の基準はあり得ないからです。恵みと真理の使者であるイエスを拒否するならば、あなたには裁きが下ります。光が来たとしても、それがあなたの人生の闇を変えなければ、あなたは光よりも闇を愛しているからこそ、裁きが下るのです。最新の真理が現れるところではどこでも、キリストの体に属するすべての人が、それを覚えて光へと向かわせ、あるいは新しい動きに従う責任があります。もしあなたがそれを受け入れないなら、裁きが下り、あなたにも裁きが下ります。イエスが来て血を流し、天に帰られたまさにその瞬間、イエスを受け入れないすべての人に裁きと裁きが下りました。フィリピンのような国で神の新しい動きがあり、ナイジェリアの私たちがそれを拒否するならば、霊界には距離がないので、裁きが下ります。これが本当に意味するのは、おそらくフィリピンでこの新しい動きを始めた聖霊は、ナイジェリアや世界の他の地域の人々をも導くべき聖霊であるということです。そして、もしこれらの国々の神の使者たちが本当に神の導きに従っているのであれば、神の聖なる運命に変化、あるいは新たな動きがあることを彼らにも告げるべきであり、皆が直ちにその動きに従うべきです。これはまさに恵みの業です。もしあなたが神を信じるならば、あなたは神をあなたの個人的な主であり救い主として受け入れなければなりません。そうすれば、あなたは罪に定められることはありません。光は罪に定められていませんが、闇は罪に定められています（つまり、一度罪に定められると、あなたは闇の中を歩み始めるのです）。

人々がイエスを受け入れた時に、裁きは決定されます。イエスがこの世に来られた時、もし誰もイエスを受け入れていなかったら、裁きは決定されなかったでしょう。裁きは人々がイエスを信じた時に決定されます。今日、キリストの体には、私たちのような一部の神の奉仕者がこの世のシステムから離れる意志を持っているため、世のシステムから抜け出すという大きな要求があります。しかし、人々がその要求に屈しなかったのは、ほんの数年前のことではありません。神の恵みを受けた民に世のシステムから抜け出すようにという神の要求、そして私たちの中には従った者もいますが、それは私たちに圧力をかけています。

外に出ることを拒否した人々だけでなく、全世界とその体制に対しても裁きが下るようにと、神の前に祈った。

それゆえ、ひとりの違反によってすべての人が罪に定められ、またひとりの義によってすべての人が義とされて、いのちを得るのである。(ローマ5:18)

イエスが来て血を流されたからこそ、信じるすべての人に義と認められるという無償の賜物が与えられました。アダムの罪のゆえに、すべての人は罪の代価を支払いましたが、イエスの死と復活のゆえに、すべての人は義と認められたのです。

なぜなら、罪を宣告する務めが栄光であるなら、義を宣告する務めは、さらに栄光に満ちているからです。(II コリント3:9)

イエスの来臨後、義認という無償の賜物がすべての人に与えられたため、裁きは増しました。もし、その律法に従う者を罪に定めるモーセの律法が栄光に満ちたものであるならば、義の産物である恵み、すなわち、罪人が信じ、告白した瞬間に義と認められる恵みは、何と云えるでしょうか。恵みは確かに栄光において勝るものであり、だからこそ、神の義を受け入れることを拒む者は、必ず裁きと罪の定めに直面するのです。

律法が入り込んだのは、罪が増し加わるためでした。しかし、罪が増し加わったところには、恵みもさらに豊かに加わりました。(ローマ5:20)

罪が地の面を覆っているところには、神の恵みは罪よりもはるかに豊かに注がれます。罪が恵みよりも豊かに注がれることは決してありません。光が来ると、罪の裁きは強まり、罪は豊かになります。

真理の知識を受けた後も、故意に罪を犯すなら、もはや罪のためのいけにえは残されておらず、ただ、敵対者を焼き尽くす裁きと激しい憤りを、恐れながら待つだけです。モーセの律法を軽蔑した者は、二、三人の証人の前で容赦なく死にました。神の御子を踏みつけ、自分を聖別した契約の血を汚れた者とみなした者は、どれほど重い罰に値するでしょうか。

恵みの御霊を軽んじたことがあるだろうか。義人は信仰によって生きる。もしひるみ退くようなことがあれば、わたしの心は彼を喜ばない。しかし、わたしたちはひるみ退いて滅びる者ではなく、信仰によって魂を救う者なのです。

(ヘブライ10:26-29, 38-39)

あなたが神と共に働き、また神から背を向ければ背を向けるほど、あなたが持つ神についての知識のゆえに、あなたに対する神の裁きはますます強まるのです。

モーセの律法によれば、罪を犯した者は、二人か三人の証人があなたに不利な証言をすれば、容赦なく死刑に処せられます。これは地上の裁きです。なぜなら、悪魔は被告人を裁きに導く者たちを用いて、ベリアルの子らを集め、被害者に不利な証言をさせるからです。そして、そのような場合、裁判官は真実を知ることができないため、被告人は不当に殺されることとなります。このような状況でも、もし人が窮地に陥る前は正しい生活を送っていたなら、永遠の罰から救われるかもしれません。しかし、ここで聖霊が使徒パウロを通して語っていることは全く異なります。なぜなら、あなた方は地上で証しをする三人（ヨハネ第一5:8参照）を軽蔑し、あなた方のために贖罪はもはや残っていないからです。なぜなら、あなた方が彼らに対して重大な罪を犯していなかったなら、彼らこそが贖罪を成し遂げていたはずの者たちだからです。38-39節で使徒パウロは、義人は信仰によって生きると語っています。これは実際には、キリスト・イエスにあって義なる人生を送るためには、神の御言葉を聞き、それに従わなければならないという意味です。「引き寄せる」という言葉はギリシャ語で「フポステッコ」で、「戻す」という言葉も「引き寄せる」と同じ意味です。これは二重参照の原則について語っています。神が同じことを二度言われるとき、それはその言葉の重大さを示し、神が言われたことよりも偉大であることを示しています。「引き戻す」という言葉は、隠す、思い込む、欺く、差し控える、覆う、背教を保留するという意味です。引き下がると、神の動きとあなたの中にある神の愛の流れを断ち切り、真実を隠し始め、あなたの中に嘘を思い込み、

欺瞞し、真実を隠し、嘘を覆い隠し、キリスト教の信仰を捨て去ることで、大きな欺瞞が生まれる余地が生まれます。

ですから、今は、キリスト・イエスにあって、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む人には、罪に定められることはありません。キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則が、罪と死の法則から私を解放したからです。(ローマ8:1-2)

イエスを受け入れ、光の中を歩む者には、罪の宣告はありません。恵みの確立は律法による罪の宣告を取り除きましたが、人間に課せられた罪の宣告は取り除かれませんでした。罪の宣告の条件が変えられたのです。律法の下では、人は罪の宣告から逃れられず、無力でしたが、恵みの下では、人は逃れなければなりません。イエスが来て、律法にあった罪の宣告の犠牲を払われたからこそ、人はイエスを受け入れることで罪の宣告から逃れることができたのです。罪の宣告は取り除かれたのではなく、罪の宣告が要求するものの代価を払ってくださったイエスを受け入れない限り、罪の宣告は依然として残ります。

もしわたしが来て彼らに語らなかつたなら、彼らには罪がなかつたであろう。しかし今は、彼らには罪を隠すものがない。(ヨハネ15:22)

これは、恵みと真理の使者である私たちの救い主イエス・キリストの口から出た言葉です。神はキリストを遣わし、私たちの罪のために死ぬだけでなく、私たちの義のために復活させ、神の義に歩む恵みを授けてくださいました。それは、キリストの言葉を信じ、キリストを人類への神の恵みとして受け入れるすべての人に与えられるためです。ですから、世界とその体制には、闇と邪悪の中に生き続ける言い訳はありません。神の光であるイエス・キリストのもとに来ず、自分の罪を明らかにし、裁きを受け、赦しを得ない者は、必ず裁きを受けるでしょう。

もしわたしが彼らの間で、ほかの人がしたことのない業を行っていなかつたなら、彼らには罪はなかつたでしょう。しかし今、彼らはわたしとわたしの父を見て、共に憎んでいます。しかし、これは、彼らの律法に書いてある言葉が成就するためです。彼らは理由もなくわたしを憎みました。(ヨハネ15:24-25)

神の恵みを受け、その内に歩む者は、恵みの中に歩んでいない人よりも多くの働きを行う力を持っています。もし

ですから、あなたたちは彼らと彼らのメッセージを拒絶し、あるいは彼らを憎むのです。つまり、あなたたちは主イエスを拒絶し、あるいは彼らを遣わした主イエスを憎んでいるのです。そして、あなたたちは神の恵みを拒絶することに伴う裁きを必ず受けることになるのです。

イエスはこう言われました。「わたしがこの世に来たのは、さばきをするためである。見える者は見えるようになり、見える者は見えなくなるためである。」(ヨハネ9:39)

恵みの使者として、イエスは義人と罪人の両方を裁くために世に遣わされました。主の言われたように見えない者は、霊的に盲目な罪人であり、自分の罪を認め、救い主イエス・キリストが与えてくださった恵みを受け入れることを受け入れた者です。そして、そうすることによって、彼らはキリスト・イエスにおいて神の義となり、神の恵みを拒むことによる断罪から逃れました。それゆえ、イエスは彼らの目のうるこを落として、霊的に見るようになるようにし、主が何を語り、何をなさるのかを悟らせると約束されました。

では、見えていて盲目にされかねない人々とは、キリスト教世界とこの世の両方に存在する、独善的、あるいは教会に通うクリスチャンの集団です。彼らは古代のパリサイ人のように、自分は罪深い人生を送っていないと信じているため、変化は必要ない、あるいは既に救われていると信じています。彼らは真理を知らないため、既に断罪の海で泳いでいます。彼らが歩んでいる闇が彼らを盲目にしているからです。彼らは使徒パウロが聖霊の導きによってここで語ったことを理解していませんでした。

ひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同じように、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。(ローマ5:19)

すべての人は罪を犯し、神の栄光に達しないからです。

(ローマ3:23)

この二つの聖句は、救いは自分にはないと心から信じている人々にとって、目を開かせる多くの聖句の一部です。聖句は、私たち皆がアダムの不従順によって罪を犯し、それゆえにこの世に来たと述べています。

神の栄光に及ばない者。これは、主イエスが私たちの希望を回復してくださったのでなければ、私たちは皆、裁きと罪の宣告を受ける運命にあったことを示しています。この豊かな賜物を拒む者は、依然として罪の宣告を受けるでしょう。

しかし、よく言う。わたしが去って行くのは、あなたがたにとって益となる。もしわたしが去って行かなければ、慰め主はあなたがたのところに来ない。しかし、わたしが去って行くなれば、わたしは慰め主をあなたがたのところ遣わす。慰め主が来ると、罪について、義について、裁きについて、世を責めるであろう。罪についてとは、彼らがわたしを信じないからである。義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたはもはやわたしを見なくなるからである。裁きについてとは、この世の支配者が裁かれるからである。(ヨハネ16:7-

11)。

慰め主は恵みの霊でもあり、世の罪を戒めるために主イエス・キリストによってずっと以前から遣わされてきました。なぜなら、世は主イエスと、主が成し遂げられたことを信じていないからです。

それは、私たちのために罪に満ちたこの体制を克服し、私たちも神の恵みを通してこの体制を克服するための道を開いてくださっています。慰め主はまた、義の世を戒めるためにもここにいらっしゃいます。なぜなら、神の義であるイエスが父のもとに戻られたからです。今、世の人々が義のうちを歩むことが大いに求められています。なぜなら、一人の人が、誰も成し遂げたことのない律法の要求をすべて守っただけでなく、律法にあった罪の代価を支払ったからです。彼（真理の御霊）は、裁きの世を戒めておられます。なぜなら、この世の君主はすでに裁かれているからです。これは、この世の体制の君主、つまり頭は、すでに裁かれ、罪に定められ、底なしの穴に投げ込まれ、後に燃える火と硫黄の湖に投げ込まれるのを待っている、ということの意味しています。では、なぜ人々は、そこから抜け出そうとしない者に同じ裁きと罪の宣告をもたらすこの体制の中で、苦勞し続けなければならないのでしょうか。これは疑い深いトマスたちが答えなければならない大きな疑問です。

第10章

人間の能力ではデビッドのためにできなかったこと
神の恵みは

イスラエルの二番目で最後の王ダビデ（キリストの千年王国と永遠の世の両方において、イスラエルの永遠の王であるという意味で最後の王）は、神によってイスラエルの王として選ばれ、油を注がれた人でした。ダビデが王として油を注がれただけでなく、預言者でもあったことを、多くの人は知りませんでした。祭司ではなかったにもかかわらず、祭司の職務をどのように遂行し、聖霊とどのように関係を築くかを理解していたのです。実際、王位に就く前も、王位に就いた時も、彼の行いのほとんどは神の恵みによるものでした。彼は神の恵みの啓示を受け、それに従って歩んでいました。ですから、神が彼を御心にかなう人と呼ぶのは驚くには当たりませんでした。なぜなら、神はご自身の恵みに従って歩む者をもてあそぶようなことはされないからです。

ペリシテ人の陣営から、ガテ出身のゴリアテという名の勇士が出てきた。その身長は六キユビトースパンであった。

彼は頭に青銅の兜をかぶり、鎖かたびらを身にまとっていた。鎖かたびらの重さは青銅で五千シェケル。足には青銅のすね当てを着け、肩の間には青銅の的を着けていた。彼の槍の柄は機織りの棒のようで、槍の穂先は鉄で六百シェケルの重さがあった。盾を持った者が彼の前を進んでいた。

彼は立ち上がり、イスラエルの軍勢に向かって叫んだ。「なぜ戦列を整えに来たのか。私はペリシテ人ではないか。お前たちはサウルの奴隷ではないか。お前たちの中から一人を選び、私のところに下って来させよ。もし彼が私と戦い、私を殺すことができれば、我々はお前たちの奴隷となる。しかし、もし私が彼に勝って彼を殺せば、お前たちは我々の奴隷となり、我々に仕えることになる。」ペリシテ人は言った。「私は今日、イスラエルの軍勢に挑戦する。一人の兵士を与えよ。共に戦おう。」サウルとイスラエルの人々はこれを聞いた。

彼らはペリシテ人の言葉を聞いて落胆し、非常に恐れた。(サムエル記上 17:4-11)

ゴリアテを見れば、サタンの複製であることが容易に分かります。ヨハネによる福音書16章で主が語られたように、この世の君(サタン)は第二天、第一天、そしてこの地が創造される前から既に裁かれていたのです。ゴリアテのケースもまさにそのように見ることができます。彼が身に着けていたものは頭から足まですべて青銅でできており、既に裁かれ、罪に定められていたことを示しています。彼は実際にペリシテ人の裁かれた罪を背負っており、ペリシテ軍を倒すためには死ぬ必要がありました。彼は既に負け戦を戦っていました。なぜなら、身に着けていたすべての青銅の力によって、彼はペリシテ人の罪を背負う罪となったからです。敵陣にいたため、彼には主イエスのように復活の恵みはありませんでした。サウルとその軍隊はゴリアテに落胆し、恐れしました。彼らもまた、人間の力に頼っていたため、罪に定められていたからです。

人間の力で悪魔に挑戦できる者は誰もいません。なぜなら、人間の力だけでは悪魔に勝つことはできないからです。人間の力、能力、そして功績の発明者は悪魔であり、それらに頼る者は悪魔と同じ裁きを受けるのです。

ペリシテ人は朝夕に近づき、四十日間姿を現した。エッサイは息子ダビデに言った。「兄弟たちのために、この炒り麦一エパと、この十個のパンを取って、陣営の兄弟たちのところへ走って行きなさい。また、チーズ十個を千人隊長のところへ持って行き、兄弟たちの具合を見なさい。

そして彼らの誓約を受け入れなさい。(サムエル記上17:16-18)

神の数算術において、40は試練または苦難を意味し、10は律法を表す数字です。つまり、イスラエルの民はペリシテ人ゴリアテの手によって40日間試練または苦難に遭ったということです。エッサイが敵と戦うために、十個のパンと十個のチーズで表された律法をイスラエルの陣営に送ったとき、律法は彼らを救うことができませんでした。なぜなら、律法が要求する義を誰も生み出せなかったからです。彼らは皆、律法に満たなかったため、罪の中にいました。

神の栄光。では、イスラエルの民が当時、どのように、そしてなぜ神の栄光に達しなかったのかを見てみましょう。

サムエルは言った。「あなたは、自分自身には小さい者と思われていたのに、イスラエルの諸部族の長とされ、主はあなたに油を注いでイスラエルの王とされたではないか。主はあなたを旅に遣わして言われた。『行って、罪人であるアマレク人をことごとく滅ぼし、彼らを滅ぼしつくすまで戦え。』」

それなのに、なぜあなたは主の声に聞き従わず、分捕り物に飛びつき、主の目に悪とされることを行ったのか。」サウルはサムエルに言った。「そうです。わたしは主の声に従い、主がわたしを遣わされた道を行って、アマレクの王アガグを連れてきて、アマレク人をことごとく滅ぼしました。しかし民は分捕り物の中から羊や牛など、ギルガルであなたの神、主にささげるために、ことごとく滅ぼされるべきもの、主なものを取ったのです。」サムエルは言った。「主は、主の声に従うことほど、燔祭や犠牲を喜ばれるでしょうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞き従うことは雄羊の脂肪にまさる。背きは魔術の罪に等しく、強情は不義や偶像礼拝に等しいからです。」

あなたは主の言葉を拒んだので、主もあなたを王位から退けられました。サウルはサムエルに言った。「私は罪を犯しました。民とその声を恐れて、主の戒めとあなたの言葉に背きました。どうか今、私の罪をお赦しください。そして私と共に立ち返り、主を礼拝させてください。」サムエルはサウルに言った。「私はあなたと共に立ち返りません。あなたは主の言葉を拒み、主はあなたをイスラエルの王位から退けられたからです。」

(サムエル記上15:17-26)

サウルはサムエルを通して神から遣わされ、アマレク人を滅ぼし尽くし、男も女も、乳飲み子も牛も羊も、ラクダもロバも、誰一人容赦なく殺すように命じられました。しかしサウルは、自分を遣わした主よりも自分の方が賢明だと考え、自らの道を歩むことを選び、神に反抗しました。さて、サウルは羊や牛などの犠牲を誰に捧げていたのでしょうか。

彼が背いた同じ神に、なぜ彼は反抗するのでしょうか。これは私たちの大多数、神の聖職者やキリスト教世界の他の信者にも同じことが言えます。多くの人は神が何を望み、何を言っているかをよく知っていますが、彼らは自分たちの方が主よりも賢く、神の言葉にそのまま従う以外にも神を喜ばせる方法があると信じています。そしてサムエルは神からの正しい答えを語りました。従順は犠牲よりも優れており、神の言葉に耳を傾けることは神に何百万もの財産を捧げるよりも優れている、と。なぜ神はこのように言ったのでしょうか。それは簡単です。あなたが主にどのような犠牲を捧げようとも、神の言葉に従わないなら、あなたは反抗的な人だからです。そして聖書は反抗は魔女狩りと同じ罪であると述べています。そして魔女狩りの罰は「魔女を生かしておいてはならない」です。この言葉から、サウルは死刑判決を受けていたことは明らかです。そして、彼は当時のイスラエルの軍の王であり指揮官であったため、アダムが罪を犯し、全創造物が罪に陥ったのと同じように、残りの軍も罪に陥り、全員が同じ死刑判決を受けていたため、彼らはすべて神の栄光に達しなかったのです（参照：エフェソス 1:13）。

（ローマ5:12-19）。

サウルもまた、当時のように神の権威の下にはいませんでした。王としての権威と王国は、すでに霊的に奪われていたからです。サタンのように死の力を持つ巨人ゴリアテの手からイスラエルの民を救うには、元々サウルの軍隊に属さず、人間としての能力、力、努力を捨てて神の恵みを受け入れる人物が、神によってその場に連れ出されなければなりません。

ダビデはサウルに言った。「彼のことで気落ちする者は一人もいないようにしてください。しもべが行って、このペリシテ人と戦いましょう。」サウルはダビデに言った。「あなたはこのペリシテ人と戦って行くことはできない。あなたはまだ若者だが、彼は若い時からの戦士なのだから。」

ダビデはサウルに言った、「あなたのしもべは父の羊を飼っていたのですが、ライオンと熊が来て、群れの中から子羊を奪っていきました。それで私は追いかけて行って、彼を打ち、羊を彼の羊の群れから救い出しました。」

口を閉ざし、彼が私に襲いかかったとき、私は彼のひげを掴み、打ち殺しました。しもべは獅子も熊も殺しました。この割礼を受けていないペリシテ人も、生ける神の軍勢に逆らったのですから、彼らのように仕立て上げられるでしょう。ダビデはさらに言いました。「獅子の爪、熊の爪から私を救い出してください。主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。サウルはダビデに言いました。「行きなさい。主があなたと共におられますように。」(サムエル記上 17:32-37)

ダビデがここで行ったことの意味がお分かりでしょうか。彼は、割礼を受けていないペリシテ人ゴリアテが生ける神の軍隊に挑んでいると主張することで、神をこの状況に引き入れました。この行為によって、神は尊敬されただけでなく、ゴリアテと他のペリシテ軍が割礼を受けておらず、したがって神との契約関係にないことを思い起こさせられました。イスラエルの軍隊は、ヤコブ、イサク、アブラハムの子孫であり、皆割礼を受けており、神との契約関係にありました。サウルの罪によって皆死刑に処せられていたにもかかわらず、だからこそ彼らは神の軍隊となったのです。しかし、契約を守る者として、アブラハムを通してイスラエルと結んだ契約関係の律法を熟知しておられる神は、ご自分の民のために確かな安全の道を探さなければなりません。だからこそ、神はダビデに靈感を与え、来て御自分の民を救われたのです。ダビデは再び、力では誰も勝利できないことを悟り、ライオンの爪からも熊の爪からも彼を救い出してください。主であり、またゴリアテの手からも彼を救い出してくださいと認めました。そしてサウルは、生ける神の名を誇りとした小さな少年の大胆さに屈服せざるを得ませんでした。

サウルはダビデに自分の武具を着せ、頭には青銅の兜をかぶらせ、また鎖かたびらを着けさせた。ダビデは武具の上に剣を帯び、出陣しようとした。まだ試していないからだ。ダビデはサウルに言った。「まだ試していないので、これで出陣することはできません。」そこでダビデはそれを脱ぎ捨てた。

彼は杖を手に取り、小川から五つの滑らかな石を選び、それを羊飼いの袋に入れて、

サウルは、たとえ袋の中にでも武器を持ち、石投げを手に持ち、ペリシテ人に近づいた（サムエル記上17:38-40）。サウルは、自分の人間的能力を信じていたので、ダビデの強さを証明するために、自分の罪深い軍服を着てダビデを武装させた。これは霊的に、ダビデが、死の宣告を受けた罪深いサウルとその軍隊と自分を同一視したことを意味する。（イエスが最初に人間と同一視するために、罪深い人間の肉と血を持って来られたのと同じように、死を通して、死の力を持つサタンを滅ぼすことができた。参照ヘブル2:14-16）、サウルの軍服を着ることによって、そしてそれを脱ぐことによって（すなわち罪と死）、死の力を持つゴリアテを滅ぼすことができたのだ。彼はダビデの頭に青銅のかぶとをかぶせたが、これは、裁かれたサウルとその軍隊の罪をダビデが負っていることを示している。彼はサウルの軍隊の一員ではありませんでした。そうでなければ、彼もまた罪に陥り、ゴリアテと戦う資格はなかったでしょう。彼は、彼らの罪を運び去るために用いた肉体を表す鎧を脱ぎ捨て、正義を表す杖（権威）を取り、恵みを表す5つの滑らかな石を選びました。羊飼いはイエスを表し、彼が石を入れた袋は彼（ダビデ）の器を表しています。

これは、主イエスが、恵みを通してご自身の器であるダビデの内にご自身の律法を確立しなければならなかったことを意味します。ダビデが選んだ5つの滑らかな石もまた、小川から出てきました。「小川」という言葉は、小さな流れを意味します。霊的に言えば、この小川は聖霊と見なすことができ、ダビデの内に神の恵みの啓示があったことを示しています。だからこそ、彼は恵みのうちに歩むことができたのです。

ペリシテ人はダビデに言った。「私の所に来なさい。私はそれらの肉を空の鳥や野の獣に与えよう。」ダビデはペリシテ人に言った。「お前は剣と槍と盾を持って私に立ち向かうが、私は万軍の主、イスラエルの軍勢の神の名によって立ち向かう。お前は主を侮辱したのだ。」（サムエル記上17:44-45）

ダビデは、人間の力ではなく、神の霊（恵み）で戦っていることを示すために、この言葉を語った。ダビデがゴリアテに語ったことは、

ペリシテ人という表現は、彼（ダビデ）がゴリアテの誇りの源である肉の腕を決して信頼せず、むしろ万軍の主の腕と力を誇っていたことを示しています。

そしてこの全会衆は、主が剣と槍で救われるのではないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであり、主はあなたたちを我々の手に引き渡されるからである。（サムエル記上17:47）

ダビデはさらに、イスラエルとペリシテ両軍に対し、剣と槍に頼り、人間の力や努力に頼っても救援は得られないことを証明しようとした。なぜなら、戦いは主の戦いだからだ。そして主の戦いは人間の力ではなく、神の恵みによって戦われるのだ。

ペリシテ人が立ち上がり、ダビデに近づき、迎え撃とうとしたので、ダビデは急いで陣営の方へ走り、ペリシテ人を迎え撃った。ダビデは袋に手を入れて、そこから石を取り、石投げで投げ、ペリシテ人の額を撃った。石は彼の額に突き刺さり、彼はうつ伏せに倒れた。こうしてダビデは石投げと石でペリシテ人に打ち勝ち、ペリシテ人を打ち殺した。しかし、ダビデの手には剣がなかった。そこでダビデは走り寄ってペリシテ人の上に立ち、彼の剣を取り、鞘から抜いて、彼を殺し、それで彼の首を切り落とした。

ペリシテ人は自分たちの勇者が死んだのを見て逃げ去った。

（サムエル記上17:48-51）。

ダビデは袋（つまり彼の器）の中に手を入れて、石（言葉）を取り出し、それを投げつけて、ペリシテ人ゴリアテを殺しました。

これは、ダビデが恵みを受け、恵みの啓示と一体となったため、一つの言葉を発し、それは一つの文を成すようなものであり、それによって一体性を示したことを意味します。つまり、彼が用いた一つの石には、父なる神、子なる神、聖霊の権威が宿っており、ダビデは彼らと一体であったため、神の権威をもって戦い、ゴリアテを殺したのです。ダビデの手には剣がありませんでした。これは、人間の力はゴリアテを殺すのに何ら役立たなかったことを示しています。ダビデはゴリアテの死後、彼の剣を取り上げ、彼の首を切り落としました。これは、敵の武器が神の力であったことを示しています。

あなたに対して使う計画は、常に、あるいはほとんどの場合、彼の計画を破壊し、場合によっては彼を殺すために使われます。もしあなたが恵みのうちに歩むなら。なぜなら、あなたが恵みのうちに歩むなら、戦いは主のものとなり、戦争においては、サタンの使者があなたに送りつけてくる武器を常に送り主に返そうと努めるからです。そして、彼らが悪行を悔い改めるまで、それはあなたに代わって彼らを苦しめることになるでしょう。

ダビデに勝利を与えたものは何だったのか

(1)ダビデはイスラエルの罪を背負うために罪を犯しました。彼はサウルの軍隊に属していなかったため、罪を犯していませんでした。サウルの軍隊には死刑宣告を受けたゴリアテに対抗できる者は誰もいませんでした。

(2)イエスは律法に定められた罪の代価を支払うことによって律法を成就されました。律法が要求するもの、すなわち義を成し遂げられました。

(3)彼は肉には何も良いものはないことを知っていたので、神の恵みに頼りました（彼はゴリアテのように肉を誇るのではなく、主を誇りました）。

(4)ダビデは神との契約関係にあった。

割礼を受けていたように、サウルとイスラエル軍も死刑宣告を受けていましたが、ゴリアテとペリシテ軍はそうではありませんでした。ダビデは契約の律法を知っており、神にそれを思い起こさせました。神はその律法を尊重し、民のために戦うことができましたのです。

(5)彼は恵みと真理の啓示を内に受け、

恵みと真理の中を歩んでいたため、ゴリアテに5つの滑らかな石全てを使う必要はなかったのです。一つは一体性を象徴し、その一つの石の中に父なる神、子なる神、聖霊なる神の神聖な力が宿っていることを彼は知っていました。これは、恵みと真理の中を歩んでいる人は誰でも、

神の言葉で作られたものは、父なる神、子なる神、聖霊なる神の絶大な力を持ち、即座に奇跡を起こします。

(6)イエスは父なる神、子なる神、聖霊なる神と一体となり、神の権威によってゴリアテに勝利しました。
イスラエルの最初の王サウルは最初のアダムを表し、イスラエルの二番目で最後の王ダビデは二番目で最後のアダム（イエス）を表します。死の力を持つゴリアテはサタンを表します。

最後に、世界中の大多数の信者に、キリストにあっていなければ（つまり恵みの中にいなければ）、終末の日に裁きを受けるという認識をもたらすために、さらに説明すべき点が残っています。多くの人にとって何の意味も持たないかもしれないこの教えにおいて、神はその慈悲を通して御言葉の啓示を明らかにされました。それによって、神の恵みとは何か、あるいは神の恵みが私たちのために実際に何をしてくださったのかを知らない神の奉仕者たちも、そして残りのキリスト教徒たちも、罪の中に生き続けるための隠れ蓑を失うことはありません。

主の言葉を思い出さない。「わたしにあってあなたがたは平安を得るであろう。あなたがたはこの世で苦難を受けるであろう。しかし、勇気を出さない。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ16:33)
誰もが望む道を選ぶことができます。私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立つからです。平和の主が、皆さんが賢明な決断を下せるよう導きますように。イエスの御名によって。アーメン。

連絡先

ジョン・A・ダニエル ヘルプ&リ

コンシリエーション・ミニストリー&バイブル・トレーニング・カレッジ（ハーマビトラック・ワールド・アウトリーチ）

HOUSE 2, D CLOSE, 4TH

AVENUE, FESTAC

TOWN, LAGOS-NIGERIA

TEL: 234 1 7212893,

7943450, 7224302, 7224303, 0803 3476693. www.harmabitrac.org

JOHN A. DANIEL POBOX 537

SATELLITE TOWN

LAGOS-ナイジェリア。

電話/FAX: 234 1 7943450 ウェブサイト:

www.harmabitrac.org

ジョン A. ダニエル POBOX

1415 ウワニ エヌグ -

ナイジェリア。

非売品

著者について

著者は、主イエス・キリストの真の弟子として生きるよう召命を受け、1989年に陣営（世界的宗教組織）から離れ、仕事、親族、友人たちから離れました。そして主は著者を自身の権威（服従）の経路の下に置き、ナイジェリアのエヌグ州アクプオガ・エメネにある荒野のような農場集落へと導きました。

主が彼の中で純粋な神の言葉をすりつぶすにつれ、彼はキリストのために多くの苦難、飢餓、苦悩、窮乏、苦悩、鞭打ち、投獄、徹夜、断食、危険などを通して彼の肉体を火で焼くことによって、厳しい訓練を受けさせられました。

彼は1992年に訓練を終え、宗派を問わずキリストの御体に終末の真理を伝える権威を授けられた者として、聖霊に用いられ、御言葉を求める聖なる人々の心にこの真理を届ける中で、今もなお苦難に耐えています。主の導きに従い、教会、家庭、奉仕団体、個人など、様々な場所でこの真理を伝えています。

彼は主の大切な贈り物であるメアリー・ブレスリングと幸せな結婚生活を送っています。メアリーは彼が主から受けている大きな恵みの源であり、この結婚生活を通してティモシー・ジョン（ジュニア）、ベンジャミン・サミュエル、そしてデイビッド・ジョセフという3人の息子に恵まれています。

ABOUT THE AUTHOR

Born and bred in Enugu by Ibo parents, John A. Daniel was called and separated unto the gospel of our Lord Jesus Christ in 1989. Just as Paul the Apostle was moved into the Arabian Desert, where he conferred not with flesh and blood, the author was also led into the Wilderness or Arabian Desert type farm settlement, in Akpuoga-Emene, Enugu, Nigeria, by the Lord Holy Spirit.

Having submitted to the authority channel of God, he was made to pass through a rigorous training as the Lord burned his flesh with fire, by grinding the Word of God in him until 1992 when his training ended.

He is a man under the authority of our Lord, and anointed with authority to minister end-time truth to the Body of Christ irrespective of your denomination.

He travels as directed by the Lord to minister in churches, homes, ministries, individuals, etc.

He is happily married to Mary Blessings, and has three sons, Timothy John(Jnr.), Benjamin Samuel, and David Joseph.